

桐の花

北原白秋

青空文庫

わがこの哀れなる抒情歌集を誰にかは献げむ
はらからよわが友よ忘れえぬ人びとよ
凡てこれわかき日のいとほしき夢のきれはし

Tonka John

桐の花とカステラ

27. V. 10

桐の花とカステラの時季となつた。私は何時も桐の花が咲くと冷めたい吹^{フルート}笛の哀音を思ひ出す。五月がきて東京の西洋料理店^{レストラン}の階上にさはやかな夏帽子の淡青い麦稈のにほひが染みわたるころになると、妙にカステラが粉つぽく見えてくる。さうして若い客人のまへに食卓の上の薄いフラスコの水にちらつく桐の花の淡紫色とその暖味のある新しい黄色さとがよく調和して、晩春と初夏とのやはらかい氣息のアレンジメントをしみじみと感ぜしめる。私にはそのばさばさしてどこか手さはりの渋いカステラがかかる場合何より好ましく味はれるのである。粉つぽい新らしさ、タツチのフレッシュな印象、實際触^{さは}つて見ても懐かしいではないか。



同じ黄色な菓子でも飴のやうに滑つすべこいのはぬめぬめした油絵や水で洗ひあげたやうな水彩画と同様に近代人の繊細な感覚に快い反応を起しうる事は到底不可能である。

新様の仏蘭西芸術のなつかしさはその品の高い鋭敏な新らしいタツチの面白さにある。一寸触つても指に付いてくる六月の棕梠の花粉のやうに、月夜の温室の薄い硝子のなかに、絶えず淡緑の細花を顫はせてゐるキンギン草のやうに、うら若い女の肌の弾力のある軟味に冷々とにじみいづる夏の日の冷めたい汗のやうに、近代人の神経は痛いほど常に顫へて居らねばならぬ。私はそんな風に感じたいのである。

*

短歌は一箇の小さい緑の古宝玉である、古い悲哀時代のセンチメントの精である。^{エツキス}古いけれども棄てがたい、その完成した美しい形は東洋人の二千年来の悲哀のさまざまな追憶^{おもひで}に依てたとへがたない悲しい光沢をつけられてゐる。その面には玉虫のやうな光やつつましい杏仁水のやうな匂乃至一絃琴や古い日本の笛のやうな素朴な Lied のリズムが動いてゐる。^{うご}なつかしいではないか、若いロセツチが生命の家のよろこびを古いソネットの形式に寄せたやうに私も奔放自由なシムフォニーの新曲に自己の全感覺を響かすあとから、寥しい一絃の古琴を新らしい悲しい指さき

でここちもちよく爪弾したところで少しも差支へはない筈だ。市井の俗人すらその忙がしい銀行事務の折々には一鉢のシネリヤの花になにとはなきデリケエトな目ざしを送ることもあるではないか。私はそんな風に短歌の句に親しみたいのである。

＊

その小さい緑の古宝玉はよく香料のうつり香の新しい汗のにじんだ私の掌にも載り、ウイスキイや黄色いカステラの付いた指のさきにも触れる。而して時と処と私の気分の相違により、ある時は桐の花の淡い匂を反射し、また草わかばの淡緑にも映り、或は

あるかなきかの刺のあとから赤い血の一滴をすら点ぜられる。

私は無論この古宝玉の優しい触感を愛してゐる。而已ならず近代の新しいそして繊細な五官の汗と静ころなき青年の濃かな氣息に依て染々とした特殊の光沢を附加へたいのである。併し私はその完成された形の放つ深い悲哀を知つてゐる。實際完成されたものほどかなしいものはあるまい、四十過ぎた世帯くづしの仲居が時折わかい半玉のやうなデリケエトな目つきするほどさびしく見られるものはない。わかい人のところはもつと複雑かぎりなき未成の音楽に憧がれてゐる。マネにゆき、ドガにゆき、ゴオガンにゆき、アンドレエエフにゆき、シユトラウス、ボオドレエル、ロオデンバッツハの感覚と形式にゆく。かの小さな^{エメロウド}緑玉の古色

は私がそれらの強烈な色彩の歓楽に疲れたとき、やるせない魂のたましひ余韻を時としてしみりと指の間から通はすだけの事である。即かりそめの病に飲む一杯の古いシヤンペンの味である。

*

私の哀しい Nostalgia がまた一絃の古琴にたまたま微かな月光の如くつかずはなれず付纏ふ時に、ある若い人達の集団はこれを唯一の楽器として、行住座臥、凡ての清新な情センチメント緒と凡ての苦い神経の悦楽とを委ねて満足してゐる。新人の悲哀は古い詠嘆の絃にのぼせて象徴の世界を觀照すべくあまりに複雑であり深刻で

あり而かも而かも傷ましいほど痛烈である、わが友よ、古い器樂の悲哀を知れ。さうしてその幽かな哀調の色に執し過ぎて些かだにその至醇なる謙讓の美德を傷つくるな。

ある時はビーヤホールのかたかげにその慎しい音色を懷かしむこともある。しかし私には白昼夏の光のふりそそぐ日比谷公園の音樂堂の上に、凡ての満足と充實した凡ての生の歡喜とを以てその古琴独奏の矜を衆人の目前に曝すだけの勇氣はない。そはあまりに無慘である。新人よ、汝の意の趣くままに、汝の心境の移りゆくままに、ある時は新しい戯曲に、小説に、パントマイムに、秋の日のはかないロマンツアに、太棹に、匈牙利古曲に、ピアノソロに、或は管絃樂オオケストラの高き調にゆき、銀笛を吹き、道化した面し

て弄玩品おもちゃの鉄琴をもうちたたけ。さうして時々その古い一絃の古
 琴のうへに疲れたる汝の柔軟しなやかな白い手をさしのべよ。遊び尽く
 した小鳥の日暮れて古巢の梢にかへるやうに、日光と快樂とに倦
 んだ心のさみしい燈心草の陰影をもとめるやうに。

*

古い小さい 緑エメロウド 玉は水晶の函に入れて刺戟の鋭い洋酒やハシ
 ツシユの罫のうしろにそつと秘蔵して置くべきものだ。古い一絃
 琴は仏蘭西わたりのピアノの傍の薄青い陰影のなかにたてかけて、
 おほかたは静かに眺め入るべきものである。私は短歌をそんな風

に考へてゐる。

さうして真に愛してゐる。

＊

私の詩が色彩の強い印象派の油絵ならば私の歌はその裏面にか
すかに動いてゐるテレビン油のしめりであらねばならぬ。その寂
しい湿潤うるほひが私のこころの小さい古宝玉の緑であり一絃琴の瀟洒
な啜り泣である。

私の新しいデリケートな素朴でソフトな官能の余韻はこの古い
本来の哀調の面目を傷けぬほどの弱さに常に顫へて居らねばなら

ぬ。

而してしみじみと桐の花の哀亮をそへカステラの粉つぽい触感を加へて見たいのである。

*

単なる純情詩の時代は過ぎた。私らはシムプルな情緒そのものを素朴な古人のやうに詠歎することに最早や少からぬ不満足を感じる。赤子の如く凡てをフレッシュに感ずる心はまた品の高い文明人の渋いアートに醇化されねばならぬ。私は涙を惜しむ。何らの修飾なく声あげて泣く人の悲哀より一木一草の感覚にも静かに

涙さしぐむ品格のゆかしさが一段と懐しいではないか。実際、思ふままのこころを挙げてうちつけに搔き口説くよりも、私はじつと握りしめた指さきの微細な触感にやるせない片恋の思をしみじみと通はせたいのである。

鳴かぬ小鳥のさびしさ……それは私の歌を作るときの唯一無二の気分である。私には鳴いてる小鳥のしらべよりもその小鳥をそのかして鳴かしめるまでにいたる周囲のなんとなき空氣の捉へがたい色やにほひがなつかしいのだ、さらにまだ鳴きいでぬ小鳥鳴きやんだ小鳥の幽かな月光と草木の陰影のなかに、ほのかな遠くの櫛の花の甘い臭に刺戟されてじつと自分の悲哀を凝視めながら、細くて赤い嘴を顫してゐる気分が何に代へても哀ふかく感じ

られる。私は如何なるものにも風情ある空氣の微動が欲しい。そのなかに桐の花の色もちらつかせ、カステラの手さはりも匂はせたいのである。

＊

私の歌にも欲するところは気分である、陰影である、なつかしい情調の吐息である。……

（小さい藍色の毛虫が黄色な花粉にまみれて冷めたい亜鉛のベンチに匍つてゐる……）

私は歌を愛してゐる。さうしてその淡緑色の小さい毛虫のやうにしみじみと私の気分にまみれて、拙いながら真に感じた自分の歌を作つてゆく……

*

五月が過ぎ、六月が来て私たちの皮膚に柔軟^{やはら}かなネルのほひがやや熱く感じられるころとなれば、西洋料理店^{レストラン}の白いテーブルクロスの上にも紫の釣鐘草と苦い珈琲の時季が来る。

私はこのいつもの詩のやうになつた Essey を植物園の長い薄あかりのなかでいまやつと書き了へたところだ。

銀笛哀慕調

I
春

一

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の^と面の^も草に日の入る夕

二

銀笛のごとも哀^{かな}しく単^{ひとふし}調に過ぎもゆきにし夢なりしかな

しみじみと物のあはれを知るほどの少女^{をとめ}となりし君とわかれぬ



三

いやはてに鬱^{うこん}金ざくらのかなしみのちりそめぬれば五月^{さつき}はきたる

葉がくれに青き果^みを見るかなしみか花ちりし日のわが思ひ出か

四

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心顫ひそめし日

五

かくまでも黒くかなしき色やあるわが思ふひとの春のまなざし

君を見てびやうのやなぎ薫るごとき胸^{むな}さわぎをばおぼえそめにき

六

南風モウパツサンがをみな子のふくら脛^{はぎ}吹くよき愁^{うれひ}吹く

南風^{さうび}薔薇^{さうび}ゆすれりあるかなく斑^{はんめ}猫^{やう}飛びて死ぬる夕ぐれ

七

凋れゆく高き花の香身に染みつ貧しき街まちの春の夜の月

寝てきけば春しゅん夜のむせび泣くごとしスレート屋根に月の光れる

八

ゆく春のなやみに堪へで

鶯も草にねむれり

たんぽぽに誰がさし置きし三^みすぢほど日に光るなり春の三味線

九

ゆく水に赤き日のさし水ぐるま春の川瀬^{かはせ}にやまずめぐるも

白き犬水に飛び入るうつくしさ鳥鳴く鳥鳴く春の川瀬^{かはせ}に

十

ひとさじ
一匙のココアのにほひなつかしく訪ふ身とは知らしたまはじ
おとな

黒耀の石の釦をつまさぐりかたらふひまも物をこそおもへ
ぼたん

薄あかき爪のうるみにひとしづく落ちしミルクもなつかしと見ぬ

寂しき日赤き酒取りさりげなく強ひたまふにぞ涙ながれぬ

卷之四

十一

あまりりす息もふかげに燃ゆるときふと唇はさしあてしかな
くちびる

くれなゐのにくき唇あまりりすつき放しつつ君をこそおもへ

十二

はるすぎてうらわかぐさのなやみよりもえいづるはなのあかきと
きめき

くさばなのあかきふかみにおさへあへぬくちづけのおとのたへが
たきかな

わかきひのもののといきのそここにあかきはなさくしづこころ
なし

ゆふぐれのとりあつめたるもやのうちしづかにひとのなくねきこ
ゆる

浅草にて

ゆく春の喇叭の囃子^{はやし}身にぞ染む 造^{つく}りばな^{ばな} 花 ちる雨の日の暮

ああ笛鳴る思ひいづるはパノラマの巴里^{パリ}の空の春の夜の月

十四

美しくしき「夜」の横顔を見るごとく遠き街^{まち}見て心ひかれぬ

薄暮^{たそがれ}の水路^{すゐろ}に似たる心ありやはらかき夢のひとりながるる

十五

そぞろあるき煙草くゆらすつかのまも哀^{かな}しからずやわかきラムボ
オ

けふもまた泣かまほしさに街^{まち}にいで泣かまほしさに街よりかへる

やはらかきかなしみきたる
 ズンの酒とりてふくめばかなしみきた
 る

ナイフとりフォクとる間^まもやはらかに涙ながれしわれならなくに

にほやかに女の独唱^{ソロ}の沈みゆくここにかなし春も暮るれば

ウイスキーの強くかなしき口あたりそれにも優^まして春の暮れゆく



夜会のあと

かくまでも心のこるはなにならむ
む紅^{あか}き薔^{さうび}薇か酒かそなたか

十七

春日笛のごとし

すずろかにクラリネットの鳴りやまぬ日の夕ぐれとなりけるかな

にほやかにトロムボーンの音は鳴りぬ君と歩みしあとの思ひ出

Ⅱ 夏

郷里柳河に歸りてうたへる歌

一

廃れたる園に踏み入りたんぽぽの白きを踏めば春たけにける

二

夕暮はヘリオトロップ、
そことなく南かぜふく

やはらかに髪かきわけてふりそそぐ香料のごと滲^しみるゆめかも

三

哀調一首

きりはたりはたりちやうちやう血の色の棺衣^{かけぎ}織るとか悲しき機^{はた}よ

四

ロンドンの悲しき言葉耳にあり花赤ければ命短し

いと高き君がよき名ぞ忍ばるる赤きロンドン赤きロンドン

狂ほしく髪かきむしり昼ひねもすロンドンの紅を^{べに}ひとり凝^{みつ}視むる

縫^{ぬい}針^{はり}の娘たれかれおとなしくロンドンの花を踏みて帰るも

ロンドン は松葉牡丹の柳河語なり

五

枇杷の木に黄なる枇杷の実かがやくとわれ驚きて飛びくつがへる

枇杷の実をかるくおとせば吾^わ弟^{おと}らが麦藁帽にうけてけるかな

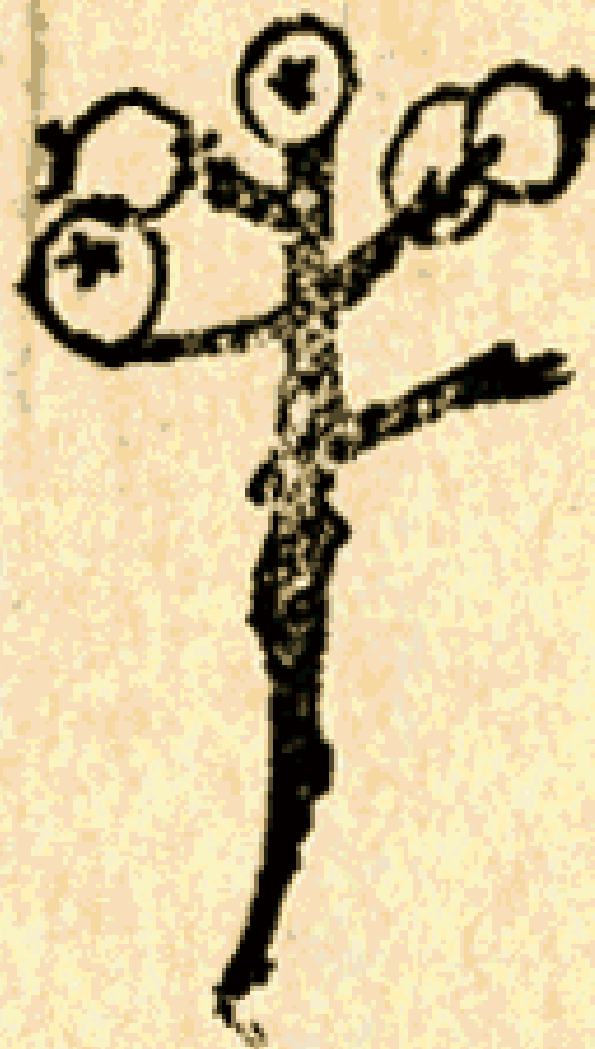
六

ケエツグリのあたまに火の点ちいた、
潜すうんだら消えた

吾弟わおとらは鳩にはのよき巢をかなしむと夕かたまけてさやぎいでつも

七

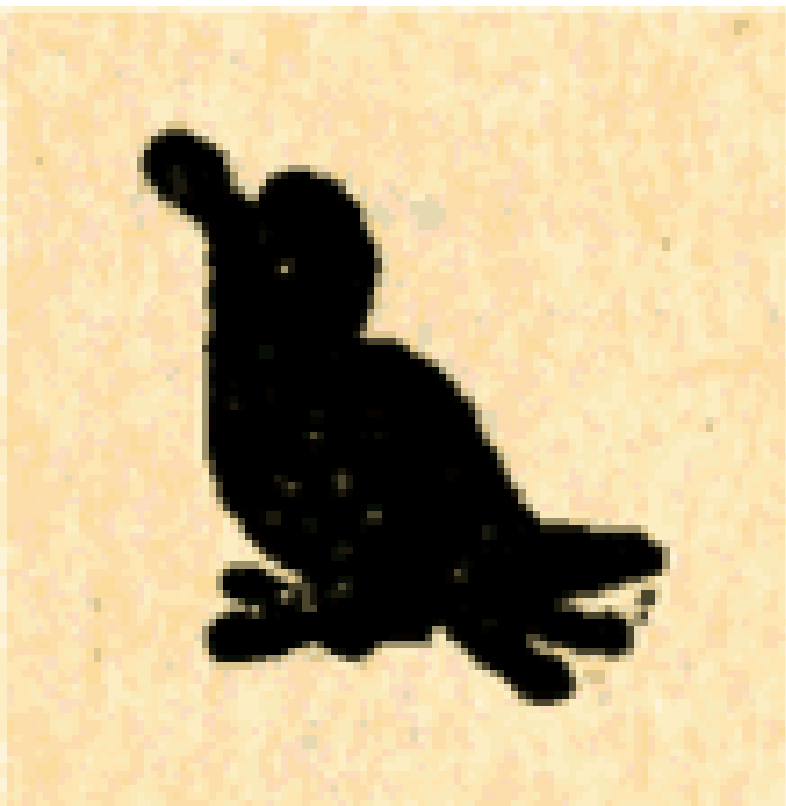
Gonshan, Gonshan, 何処へいた、
きのふ札ふだしよ所の巡礼に



馬鈴薯の花咲き穂麦あからみぬあひびきのごと岡をのぼれば

黒^{くろ}鷺^{つぐみ} 野辺にさへづり 唐^{たう}辛^{がらし}子^し いまし花さく君はいづこに

燕^{つばさ} コツキリコ、 畦^{あぜ}道^{みち} やギリコ



病める児はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし烟ばたの黄なる月の出

Ⅲ 秋

一

日の光金糸雀カナリヤのごとく顫ふとき硝子に凭よれば人のこひしき

二

啄木鳥きつつきの木つつき了おへて去りし時黄なる夕日に音ねを絶ちしとき

雲あかく日の入る夕木^{きぎ}々の実の吐息にうもれ鳴く鳥もあり

三

あかあかと五重の塔に入日さしかたかげの闇をちやるめらのゆく

かかる時地獄を思ふ、君去りて雲あかき野辺に煙渦まく

IV 冬

一

十一月北国の旅にて三首

葦崎の白きペンキの駅標に薄日のしみて光るさみしさ

柿の赤き実、旅の男が気まぐれに泣きて去いにきと人に語るな

たはれめが青き眼鏡のうしろより朝の雲を透かすまなざし

二

久留米旅情の歌

日も暮れて櫛^{はじ}の実採^{とり}のかへるころ廓^{くるわ}の裏をゆけばかなしき

三

猫やなぎ薄紫に光りつつ暮れゆく人はしづかにあゆむ

水面^{みのも}ゆく櫂のしづくよ雪あかり漕げば河風身に染みわたる

四

雪のふる夜昔ながらの蠟燭の裸火にうつし出されし団
蔵の仁木の凄さよ

わが友は仁木の顔に面^{つら}あかりさしつけながら花道をゆく

初夏
晚春

I 公園のひととき

一

手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ

二

山羊^{やぎ}の乳と山椒のしめりまじりたるそよ風吹いて夏は来りぬ

指さきのあるかなきかの青き傷^{きず}それにも夏は染^しみて光りぬ



三

草わかば黄なる小犬の飛び跳ねて走り去りけり微風そよかぜの中

草わかば踏めば身も世も黄に染みぬ西洋辛子の粉を花はふり撒くま

こころもち黄なる花粉のこぼれたる薄地のセルのなで肩のひと

草に寝ころべ、草に寝ころべ

草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝^ねて削るなり

四

夕されば棕櫚の花ぶさ黄に光る公園の外^{そと}に座^{ことひき}る琴弾者

II 郊外

一

田舎^{ゐなかや}家に中風病みのわが小父^{をぢ}が赤き花見る春の夕暮

二

きさくなる蜜蜂飼養^{みつばちかひ}者が赤帯の露西亞^{ぢぬし}の地主に似たる初夏

あまつさへ赤き花ちり小馬嘶^なく農家の白日^{ひる}になげき入りぬる

三

ほそぼそと出臍でべその小児笛こどもを吹く紫蘇の畑の春のゆふぐれ

太葱ふとねぎの一茎ごとに蜻蛉とんぼゐてなにか恐るるあかき夕暮

Ⅲ 庭園の食卓

青き果のかげにわれらが食卓をしつらへよ、春を惜む
わかき日のこころよ

一

あひびきの朝な夕なにちりそめし鬱^{うこん}金ざくらの花ならなくに

二

サラダとり白きソースをかけてましき春の思ひ出のため



さくらんぼいまださ青に光るこそ悲しかりけれ花ちりしのち

三

青き果^みのかげに椅子よせ春の日を友と惜めば薄雲のゆく

酒注^つげば黄なる薄雲桐の木の木の間に見えて夏は来にけり

四

かなしげに春の小鳥も啼き過ぎぬ赤きセエリーを君と鳴らさむ

燕つばめ、燕、春のセエリーのいと赤きさくらんぼくは啣くはえ飛びさりにけり

五

ああ五月さつき蛩せむし匍はひいでチキタリス小ちさき鈴すずふるたましひの泣く

金きん口ぐちの露西亜煙草のけむりよりなほゆるやかに燃ゆるわが恋

六

やはらかに誰が喫^のみさしし珈琲^{コオヒイ}ぞ紫の吐息ゆるくのぼれる

よき椅子^{いす}に黒き猫さへ来てなげく初夏晩春の濃きココアかな

七

蟾蜍が出て来た、皆で寄つてたかつて胡椒をふりかけたり、スープを飲ませたりした

しろがねの小さき匙もて 蟾ひきがへる 蛭 スープ啜るもさみしきがため

八

干葡萄ひとり摘み取りかみくだく食後のほどをおもひさびしむ

カステラの黄なるやはらみ新らしき味ひもよし春の暮れゆく

九

昼餐^{ひるげ}どきはてしさびしさ春の日も紅茶のいろに沈みそめつつ

まひる野の玉葱の花紫蘇の花かろく哀^{かな}しみ君とわかるる

IV 春の名残

一

一九一〇暮春三崎の海辺にて

いつしかに春の名残となり^こにけり昆布干場^{こんぷほしば}のたんぽぽの花

寝てよめば黄なる粉^{こな}つく小さき字のロチイなつかしたんぽぽの花

春愁極りなし

野薊^さに触^{さは}れば指^{おゆび}やや痛^{いた}し汐見てあればすこし眼いたし

二

洋^{らしやめん} 妾^{めかけ} の長き湯浴^{ゆあみ}をかいま見る黄なる戸外^{とのもつばくら}の燕^{つばき}のむれ

ふはふはとたんぽぽの飛びあかあかと夕日の光り人の歩める

三

乳のみ児の肌のさはりか三^{さん}の絃^{いと}なするひびきか春のくれゆく

魔法つかひ鈴振花の内部に泣く心地こそすれ春の日はゆく

四

「春」はまたとんぼがへりをする児らの悲しき頬のみ見つつかへ
るや

昼
の
思

六月が来た、なつかしい紫のヂキタリスと苦い珈琲の時節、赤い土耳其帽の蛍が萎え、憂鬱な心の蟾蜍^{かへろ}がかやつり草の陰影^{かげ}から啼き出す季節——而してやや蒸し暑くなつたセルのきものの肌触りさへまだ何となく棄て難い今日此頃の気懣^{けだ}るい快さに、ふつくと軽いソファに身を投げかけて、物憂げに煙草をくゆらし、女を思ひ、温かい吐息と、真昼マグネシヤの幻光の中に幽かな黄昏の思想を慕ひ恍惚^{ツワイライト}の薄明を待つわかい男の心ほど悩ましいものはあるまい。

零時二十三分、日の光はヴェニス模様の色硝子を透かして窓掛の浮織を悩まし、人も居ない珈琲店の空椅子には、今恰度真白な



猫がまるで乳酪かたまりの塊のやうにとろみかけてゐる。而して誰が喫のみ
 したのか、眩くらばゆい食卓の一角から軟やはらかな珈琲の吐息がたち
 のぼる。

珈琲、珈琲、ひとりでにわれとわが心の匂を温め乍ら、やはら
 かな紫のいろにたちのぼるその吐息、病ましい物思の何とも捉へ
 どころのないやうなその香煙の纏れを、懶怠なまけた身の起伏おきふしに何と
 いふこともなく眺めやる昼の男の心持、また逃げてゆく「時」の
 うしろでをも恍惚うつとりと空に凝視みつむる心持……

ゴツホの狂ほしい外光の痛さ、ゴウガンの粗あらい生そのものの調
 色、或はマチスやピカソ、物を角に見るキュビストの新らしい神
 経の触覚よりもかういふ日の疎うとましい懶怠なまけものの心にはあのルノ

ワアルなどのふくよかな色の温味と悩ましい息づかひの魅力、さうしたものの美しさがどれだけ豊醇な親しさと懐かしさをおぼえさせてくれるか知れない。

珈琲の煙はまだ消えもやらずにたちのぼる。やや疲れたらしいやうな口オデンバツハの物おもひ、美しい宝石商人の溜息、ボオドレエルの苦笑ひ、或はレニエ、サマンの曇りと優しみ、それらを一つにしてたちのぼるわが珈琲の匂の強さ、なつかしき、心もとなき、いらいら苛々しき……何よりも芸術の粹を慕ふ私の心は渾然としたその悲念の溶とろましさに訳わけもなく苛いぢめられ、魅せられ、ひき包まれ、はたまた泣かされる。さてはあの怪しい沈黙の秒刻に譬へやうもない靈魂の戯すゝりなき 歎をかりそめにも聴き逃さなかつたヴェ

ルレエヌの純一な気分も恰度デリケエトなかういふ心持では無かつたか。

珈琲の煙はとりもなほさず心の言葉である。匂である。色であり音楽である。而して洩くて苦い珈琲末は心の心、靈魂の生地きぢ。匙は感覺。凡て溶かして搔き廻す觀相の余裕ゆとりから初めてとりあつめた哀樂のかげひなたが軟かな思の吐息となつてたちのぼる。もの思はしい中に限りもない色と香の諸相をひき包んで六月の光線に美しい媚のあや糸を纏もつらす苦い珈琲の風味は決して自己われを忘れたロマンチックな空の幻でも單純な甘いセンチメントの歎きでもない。眞実、珈琲から珈琲の煙が立つやうに内心の深みから素直に心の吐息を搔き立たせてその融合渾沌のさかひに怪しい芸術の

矜持と魔力とを物静かに薫らし得る純一な詩人の歓会はまた何にもかへがたい真言秘密の妙諦である。世に天才の名を恣にする人達の間にも真にわが靈の句を知り、言葉のかげひなた、ものの媚色あひ、幽かな色触香響の末の末まで嗅ぎわけて常に怪しい悲念にかき暮れ得る高貴な心の所有者は極めて少い。況して世のつねのかいなでびとが心をや。芸苑の中にしてなほ荒削りの珈琲末を悦び、但しは心と言葉の距離徒に遠くしてそのみなもとの苦き香氣を忘れたつやもない思想家と偽りものの工人の世には多きよ。珈琲、珈琲、珈琲の煙はまだ冷め^さもやらずにたちのぼる。紫いろの息づかひ、ロダンの線画……

乳酪の猫がまだ夢みるやうにその光つた尻尾^{しっぽ}の尖の細かな緑色

の痙攣を凝視^{みつ}めてゐる。^{あなぐら}窖のやうな入口からくわつと明るい銀座の通が見える、白日の輝き、濡れた舗石、柳の葉、そのかげの赤い草花の鉢、寄せかけた自転車の銀の輪……

目に見えぬ空の何処^{どつ}かで花火が揚る。

そのうちにやや陰影の曇りを煙らした室内の光に懶怠^{なま}けはてた私の物思が今はもう珈琲の匂にさへ堪へがたいほどの疲れをおぼえる。而してただそこはかとなくアンダンテの夢の調子に堕ちてゆく。

私は思ふ、男をんなの夏の中夜の秘戯^{たはむれ}をかういふ昼の悩ましさにかく描きつづけてゐた歌麿の氣持、まだ暮れもやらぬ昼の舞台に黄色いランプを点^{とも}す若い女形^{をやま}の心持、白芥子の花に纏^{まつは}る昼

の幽霊、投げやりな昼間の三味線、湯上りの肌に匂ふあかい石竹、
而して白日の光にうち揚ぐる夜の花火の紅緑・翡翠・土耳其玉・
銀光の紫……目に見えぬ星と宝玉の一悲劇、眩耀と消滅の夢。

而してまた公園の昼のアーケ燈を、白昼のシネマトグラフの瞬
き、或は薄い面紗のかげに仄かに霞む人妻の愁はしい春の素顔を。
総じて明るい中の物の瞬き、幽愁の燦^{いぶ}し、疲労と陰影の薄笑ひ、
眩暈中の杏仁水、それらから来る寂しき、悲しき、なつかしき、
さうした優しさ果敢なさ溶^{とろ}ましさが私にはあの悲み極まつた純情
の嗚咽、あらゆる観念の寂び、綺羅を鏤めた美しい夜の横顔、或
はサロメ女王の驕奢を尽した踊の手さばきよりも却て染々とした
歎息の推^{うつりかはり}移^りを感じしめる。

涙を惜め、涙を惜め、高品なわかい心のそこひもわかぬ胸の秘
奥に啜り泣けよ。芭蕉の寂びはまだうら若い私達が落ちつくところ
ではない、少くとも世を楽しむメエテルリンクの悲愁と神かなしみ ミスチ
秘ツクな蒼い陰影の靄の中に寂しい心の在所ありかを探す物馴れぬ Strang
erの心持、その心を私は慕ふ。

乳酪の白い猫が幽かに鼾をかきはじめた。その時私も静かに女
を呼んで一杯のウオツカを求める。この昼の暑さに無色透明なウ
オツカが小さなりキュグラスを透かして冷たい漣つめを立てる。その
投影がまたプリズムのやうに、頁を開いてあるモウパッサン集の
黒い活字に細こまごま々と果敢ない染色をちらつかす。

ふと点の赤い i の字がひとつ眼につく。それが物憂げに動いて
 上の行の *Chambre* の b の字に匍ひ出し、しんみりと蒼い光を立てて斜めに *Les enfants* の l を横ぎり、もひとつ上の行 *Passion* の p に喰ひつくやうに留まつた。蛍だ、疲れた小さな蛍、点の赤い i の字、その尻を抓むと力のない人霊色の燐光が怪しい湿潤しめりを放つ。私は何時しか幼い少年の日の心に歌つた「おもひで」のあの蛍の一聯を思ひ出した。

そなたの首は骨トラムブ牌の

赤いヂヤツグの帽子かな、

光るともなきその尻は、

感か冒ぜのここにほの青し、

しをれはてたる幽霊か。

透き徹つたウオツカと蛍の赤い点、その冷たさ悩ましき、私は染々と昼の蛍に執着する。而してその銀の燐^{いぶ}しをかけた蒼白い哀傷の光を愛する。

業平の高い調はまさ^{しらべ}に感じ易い夜の蛍のセンチメントである。私達は時としてその繊細な平安朝の詠嘆、乃至は純情の雅びやかなる啜り泣き、若くは都鳥の哀怨調に同じ麗らかな心の共鳴を見出す事はある、而しなほ苦い近代の芸術にはまだその上に堪へがたいセンジュアルな日光の触覚と渋い神経の瞬きとを必要とする。鏽銀の昼の燐しを必要とする。さもなくばアーク燈の眩ぶしい光のかげにあるかなきかに飛ぶ夜の蛍の燐光を闇の夜のそれよりも

更に哀れぶかくやるせないものに感じなければならぬのである。
午後二時過ぎ、螢はいつのまにか珈琲碗のかげにかくれて白い
頁の Passion の P の字のみが強く光り出した。

乳酪の白猫がまだ睡つてゐる。昼寝から覚めた料理人が今また
青い甘藍の球でも撈ぎとるのか厨の方で新らしい野菜のにほひが
すすろぐ。さうして水道栓の水の滴り、誰かしら吹き鳴らす昼の
銀笛……

私の気まぐれな聯想はまた鮮な郊外の景色に手を振つてゆく郵便
脚夫の白い帽子に飛んでゆく。ゴツホの野外の景色、段々畑の
銀緑色に雨の霽れ間の郭公が啼き叫び、白い葱の花のかげから出

臍の児が裸のままて笛を吹く……

凡ての因襲から放れ、馴れ過ぎた官能の愛着を断ちきり、而して更に新らしい驚異の鋭感にやるせなきわれ自らの^{たましひ}霊を慄かす近代の心にもなほありしそのままの声音に郭公は啼き、寂しい日本の笛は鳴る。ただ感ずる詩人の触覚と、周囲の気分の如何に依て古くも珍らしくも聴き倣されるのである。

笛は鳴る、夜の笛より昼の音色のわびしさを、公卿の物の哀れよりも弥さらに病児の温かいその吐息を、私の神経は悲しむ、而して葱のあたまに縛るる白い羽虫のやうに羽ばたく。

笛の音は何時の世までも滅びない、日本の笛の哀れさも何時の如何なる人の心にも染み込んでゆく。その笛本来の幽かな弱い寂

しきは誰しもの胸の中に生れながらに秘められた純情のなげきである。高貴な内心の噉り泣き、やがては奔放限りなき管絃樂のそのみなもとである。

そのみなもとを悲しめ、而して至醇なそのみなもとの歌の氣稟をかりそめにも傷くるな、笛の匂を知れ、完成された大和歌の心根に更に悲しい銀光の燦しをかけよ。ただ懐かしいその笛に強ひては残虐な煤煙の濁りと工場の鉄の響を吹きかけるな。

私はただ馴れ過ぎた ブルジョア 俗人の詠歎を忌む。されば日本の笛を

取る心もちにもなほ鮮かな Stranger の驚異と感觸を貴み、目白僧園の鐘の音にアベマリヤの晚鐘を忍ぶ以太利亜旅人の春愁を悟り、
かをり
 異国の菊の香に新らしい流離の涙をそそぐピエルロチが秋の心を

またとなく懐かしむ。私はまた梅の木に鳴く鶯よりも脳病院の窓に鳴く鶯に泣き、定斎の軋みに驚く鶯に連れて驚く。有明の月に血を吐くほととぎすの悲歎を曾て見知らぬ私は寧ろキヤベツ畑の雨に啼く郭公を楽しいものに哀れみ、昔ながらの古い前栽の繁みに飛ぶ螢よりも客待の人力車のかげに仄かに蒼白いお尻のパツチを光らす東京の螢をこの上なく今の心に親しむ。さりながら凡ての因襲から逃れて常に新らしい官能の薄明りにわれとわが靈の在^ありか所をたづねゆくわかい旅人の心にも思ひ棄てがたきは日本の笛のあはれである。哀みのそのみなもと、純情のかの吐息である。

時が経つた。いつしか黄ばみかけた日の光のもとに、薄青いク

ローバ模様の壁にかけた玩具の木時計が可笑しをかさうにお尻おしりの分銅を動かし乍ら今三時を点つ。而して驚かされた乳酪かたまりの塊が椅子の上からすべり下り、料理人コックが細かに玉葱の庖丁を刻み、懶なまけたソファの物思が軟かに温かい欠伸をつく。

くわつとした入口の外の明るさ、自転車が去り、草花の赤い鉢に静かに煉瓦屋根の投影が軽い塵埃ほこりと纏れる。

Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

Gristchen, gristchen, tutch, tutch, tutch!

鳥屋が通る、くわつと明るい人道を車を曳いて。

Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

車の上の円い四角な金網作りの、或は竹製の、大小さまざまの

鳥籠、その鳥籠が六月の日に揺られながら蒸しかへるやうに光つてゆく。

Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

Gristchen, gristchen, tutch, tutch, tutch!

薄明の時

I
放埒

一

美しくしきかなしき痛き放埒の薄らあかりに堪へぬこころか

二

ものづかれそのやはらかき青縞のふらんねるきてなげくわが恋

わがゆめはおいらん草さうの香のごとし雨ふれば濡れ風吹けばちる



三

鳴きしきるは葦きり、舌うつは海、さるにてもせんな
や、夜の明けがたのつれびき

アーク燈^{とも}点れるかげをあるかなし螢の飛ぶはあはれなるかな

四

なんぼ恋には身が細ろ、
ふたへの帯が三重まはる

五

なにとなく軍鶏しやもの啼く夜の月あかりいぶかしみつつ立てる女か

博多帯しめ、筑前しぼり、筑前博多の帯しめて、
あゆむ姿は柳腰……

すつきりと筑前博多の帯をしめ忍び来し夜の白ゆりの花

六

ぬば玉の銀杏がへしの君がたば美しくし黒し蓮の花さく

七

ある遊女の部屋に、薄い硝子の水盤があつた、夏の夕方、夜のひきあけ、ひけすぎの薄いあかりにほのかにウオタアヒヤシンスの花が咲いてはまた萎れてゆくのであつた

水盤の水にひたれるヒヤシンスほのかに咲きて物思はする

八

フラスコに青きリキュールさしよせて寝^ぬればよしなや月さしにけ
り

二上りの宵のながしをききしよりすて身のわれとなり^にけむかも



九

毒草なれどもその花かすかに、
光あれどもその色さびし

十

雪の下白く小さく^{ちひ}咲きにけり喜蝶が部屋の箱^{はこ}庭^{には}の山

わかき身の感じ易さよ硝子杯さかづきの薄き罍ひびにも心染しみつ
顫へ易く傷つき易き心あり薄らあかりにちる花もあり

十一

鳥よ、鳥よ、宿場の小鳥、
広重の海に飛べよ

木の枝に青き小鳥のとまりゐてただほれぼれと鳴ける品川

十二

年増のなげき一首

玉虫の一羽ひとは光りて飛びゆけるその空ながめをんな寝そべる

II 踊子

一

悩ましく廻りまは梯子はしごをくだりゆく春の夕の踊子がむれ

二

やるせなき春のワルツの舞すがた哀かなしくるほし君の踊をどれる

美しくきさいへかなしく愚かしき疲つかれつくと踊子踊る

紫のいたましきまで一人踊るスカートひとりの陰影かげに春はくれゆく

ただ飛び跳ね踊れ踊子現身うつつそみの沓くつのつまさき春暮れむとす

三

たらんてら踊りつくして疲れ伏す深むらさきのびろうどの椅子

あでやかに踊りつかれしさみしさか寝椅子に人を待てるこころか

四

くろんぼが泣かむばかりに飛び跳^はぬる尻ふり踊にしくものはなし

Ⅲ 浅き浮名

一

恋すてふ浅き浮名もかにかくに立てばなつかし白芥子の花

二

薄青きセルの単衣ひとえをつけそめしそのころのごとなつかしきひと

片恋のわれかな身かなやはらかにネルは着れども物おもへども

三

茴香さく

わが世さびし身丈みたけおなじき
 茴うゐきやう香も薄黄に花の咲きそめにけり

茴香の花の中ゆき君の泣くかはたれどきのここちこそすれ

四

白き籐椅子をふたつよせてものおもふひとのおだやか
さよ。読みさせるはアルベエル・サマンにや、やはら
かに物優しき夕なりけり

さしむかひふたり二人暮れゆく夏の日のかはたれの空に桐の匂へる

五

潮来出島の真菰の中にあやめ
咲くとはしほらしや

かきつばた男ならずばたをやかにひとり身投げて死なましものを

六

たんだ振れふれ六尺袖を

桐の花ことにかはゆき半玉の泣かまほしさにあゆむ雨かな

七

すずかけの木とあかしやとあかしやの木とすずかけと
舗石みちのうす霧に

ほのぼのと人をたづねてゆく朝はあかしやの木にふる雨もがな

IV 蟾蜍の時

螢飛び蟾蜍かへろ啼くなりおづおづと忍び逢ふ夜の薄霧の中

二

蟾ひきがへる 蜍 幽霊のごと啼けるあり人よほのかに歩みかへさめ

ゆくりなくかかるなげきをきくものか月蒼ざめて西よりのぼる

三

ぬばたま
烏羽玉の夜のみそかごと悲しむと密かに墓も啼けるならじか

宝玉のこよなき心とり落しよきひと泣けば墓もまた啼く

四

いかばかり麻の畑の青き葉の身には染むらむ人妻の泣く

ぬばたま
人知れず忍ぶ心は烏羽玉の黒き夜のごとかがやきいでぬ



V
猫と河豚と

一

青柿のかの柿の木に小夜ふけて白き猫ゐるひもじきかもよ

二

白き猫膝に抱けばわがおもひ音なく暮れて病むここちする

白き猫泣かむばかりに春ゆくと締め^しつゆるめつ物をこそおもへ

三

弓矢八幡寝はせねど、寝たと
おしやらばなとせうぞの

夜おそくかけしふすまに匍ひのぼる黒きけもののけはひこそすれ

四

乳^{にゅうりよく} 緑^{りよく} のびろうどの河豚^{ふぐ} 責めふくらし昨日^{きのふ}も男涙ながしき

河豚^{ふぐ}よ河豚^{ふぐ}よ汝^{なれ}は愚かし地に跳ねて沖津玉藻の香のなげきする

VI 路上

春

いそいそと広告燈も廻るなり春のみやこのあひびきの時



夏

白耳義新詩人のものなやみは静かにしてあたたかく、
芭蕉の寂はほのかに涼し

かはたれのロウデンバツハ芥子の花ほのかに過ぎし夏はなつかし

水路

空見ればアークライト円弧燈に雪のごと羽虫たかれり春よいづこに

かはたれ薄暮のすゐろ水路にうつるむらさきのこたう弧燈の春の愁なるらむ

新橋

新らしき匂なによりいとかなし勧工場のぞく五月のこころ

じんりき人力車のかんぼん提灯つ点けて客待つとならぶ河辺に螢飛びいづ

銀座

薄あかり紅^{あか}きダリヤを襟にさし絹^{シルク}帽^{ハット}の老いかみゆく

夏よ夏よ鳳仙花ちらし走りゆく人力車夫にしばしかがやけ

おそ夏

折ふしのものの流行^{はやり}のなつかしくかなしければぞ夏もいぬめる



両国

万歡夢のごとし

青玉のしだれ花火のちりかかり消ゆる路上を君よいそがむ

初秋

夏の夜の牡丹燈籠の薄あかり新三郎を誰か殺せる

ちりからと硝子問屋の燈籠の塵埃^{ほこり}うごかし秋風の吹く

雨のあとさき

I 雨のあとさき

一

新らしき野菜畑のほととぎす背広着て啼け雨の霽^はれ間^まを

キヤベツの段々^{だんく}畑銀緑^{ばたけ}なり雨霽れ空に白雲の湧く

あまつさへキヤベツかがやく畑遠く郵便脚夫疲れくる見ゆ

二



入日うくるだらだら坂のなかほどの釣鐘草の黄なるかがやき

窓ぎはの男の頬のみ明^{あか}う見せ釣鐘草の中を汽車ゆく

三

酒場の夏

夏帽子瀟洒につけて身をやつす若き紳士の白百合の花

四

夏の日はなつかしきかなこころよく梔くちなし子の花の汗もちてちる

きりぎりすよき淫たはれ女めがひとり寝て氷食む日となりにけるかな

五

やるせなき淫みだら心となりにけり棕櫚の花咲き身さへ肥ふと満れば

黒き猫夜は狂ほしくかきいだき五月蠅きものに昼は跳ねやる

六

桐の花ちるころ

人妻のすこし汗ばみ乳をしぼる硝子杯コップのふちのなつかしきかな

七

梅雨くるまへ

栗の花四十路過ぎたる髪結の日暮はいかにさびしかるらむ

八

あかしやの花ふり落す月は来ぬ東京の雨わたくしの雨

検温器^{けんおんき}かけてさみしく涙ぐむ薄き肌あり梅雨^{つゆ}尽きずふる

二階より桐の青き葉見てありぬ雨ふる街^{まち}の四十路^{よそぢ}の女

七月やおかめ鸚哥^{いんこ}の啼き叫ぶ妾^{めかけ}宅の屋根の草に雨ふる

九

色硝子暮れてなまめく町の湯の窓^{もと}の下なるどくだみの花

湯上りの好いた娘がふくよかに足の爪剪る石竹の花

十

長雨ながさめの蒼くさみしく淫たはれてしその日かの日もいまは恋しき

長雨のあとのこころにひるがへり孔雀火のごと鳴く日きたりぬ

十一

新らしき皮膚の痛いたみかたましひの心しんの汗より来るなげきか

たもちがたきところとところ薄ら青き蝗のごとく弾ねてなげくや

十二

憎きは女、恋しきもまた女

憎^{にくしみ}惡のこころ夏より秋にかけ茴香の花の咲くもあはれや

十三

昼見えぬ星のこころよなつかしく刈りし穂に凭り人もねむりぬ

あかあかとあひる驚卵を置いてゆく草場のかげの夏の日の恋

十四

夏の日ば女役者のものごしのなまめかしさに似てさびしけれ

紫の日傘さしかけ憂うき人ののらりしやらりと歩む夕ぐれ

十五

やはらかに夏のおもひも老いゆきぬ
中年の日の君がまなざし

II 昼の鈴虫

明治四十四年の夏、
蠣殻町の岩佐病院にて

その日

なつかしき七月二日^{ふつか}しみじみとメスのわが背^せに触れしその夏

麻酔のまへ

麻酔の前鈴虫鳴けり窓辺には紅く小さき^{ちひ}朝顔のさく

麻酔の時

夏はさびしきコロロホルムに痺^{しび}れゆくわがこころにも啼ける鈴虫

朝顔を紅くあか小さしと見つるいのち消えむとぞする鳴け鳴け鈴虫

麻醉のあと

燕つばめ、燕つばめ、昼の麻醉のさめがたに宙がへりして啼くはさびしも

午前午後

気のふれし女寡婦をんなやもめのいと蒼くしまりなき眸めに朝顔のさく

創^{きず}いたしかなし鋭しまたさびし
狂^{きちがい}人の部屋に啼ける鈴虫

夕ぐれ

ほのかなる水くだもののにほひにもかなしや心疲れむとする

さしのぞけば向ふの寄^よ席^せに人形の治兵衛踊れりなんとせうぞの

宵のくち

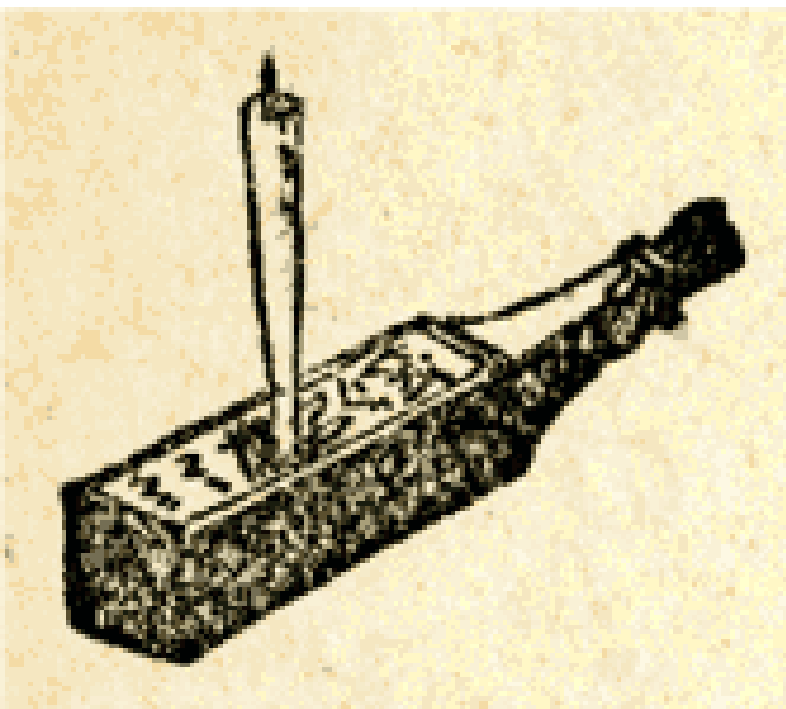
なにおもふわかき看護婦夏過ぎて雨夜あまよの空に花火あがれる

宵のくちそれもひととき看護婦のはるもにか吹く夏もひととき

立秋

退院の前の日

長廊下いろ薄黄なる水薬の瓶ひとつ持ち秋は来にけり



秋思五章

I
秋のおとづれ

一

松脂のほひのごとく新らしくなげく心に秋はきたりぬ

二

薄らかに紅く孱弱かよわし鳳仙花じんりき人力車の輪にちるはいそがし

鳳仙花うまれて啼ける犬ころの薄き皮膚より秋立ちにけり

上海



三

秋の空酒をしが顰めて飲む人の青き額ひたひに顫ひそめぬる

眼のふかく昼も臆する男あり光れる秋をぢつと凝視みつむる

四

しやうぎん
鏞銀の蠅取蜘蛛をまづ活かし秋はさやかに光りそめぬる

君がピンするどに青き虫を刺すその冷た^{つめ}さを昼も感ずる

五

かかる日の胸のいたみのしくしくと空に光りて雨ふるらむか

しづやかに光の雨のふりそそぐ昼の心に蒼ざめてあり

II 秋思

一

クリスチナ・ロセチが頭巾かぶせまし秋のはじめの母の横顔

二

食堂の黄なる硝子をさしのぞく山羊やぎの眼のごと秋はなつかし

三

秋の草白き石しやぼん罅ひの泡つぶのけはひ幽かに花つけてけり



人形の秋の素肌となりぬべき白き菊こそ哀^{かな}しかりけれ

四

旅に来て船がかりする思あり宝石商の霧の夜の月

五

みすずかる信濃か日本アルプスカ空のあなたに雪の光れる

静かなる秋のけはひのつかれより桜の霜葉ちりそめにけむ

Ⅲ 清元

一

清元の新らしき撥君が撥あまりに冴えて痛き夜は来ぬ

二

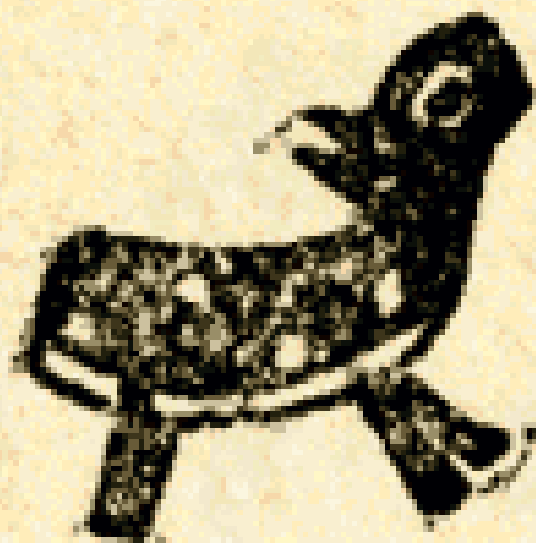
手の指をそろへてつよくそりかへす薄らあかりのもののつれづれ

ひいやりと剃^{かみそり}刀ひとつ落ちてあり鶏頭の花黄なる庭さき

三

微^{かす}かにも光る虫あり三味線の弾きすてられしこまのほとりに

蟋蟀^{いとど}ならばひとり鳴きてもありぬべしひとり鳴きても夜は明けぬ
べし



四

円喬のするりと羽織すべらするかろき手つきにこほろぎの鳴く

太^{ふとぎほ}棹のびんと鳴りたる手元より夜のかなしみや眼をあけにけむ

昇菊の絃のつよさよ

黒き猫しづかに歩みさりにけり昇菊の絃^{いと}切れしたまゆら

きりきりと切れし二の絃いとつぎ合せ締むるころか秋のをはりに

五

歌舞伎座十月狂言所見

常盤津の連弾つれびきの撥いちやうに白く光りて夜のふけにけり

IV
百舌の高音

一

百舌啼けば紺の腹掛新らしきわかき大工も涙ながしぬ

二

いらいらと葱の畑をゆくときの心ぼそさや百舌啼きしきる

いつのまに刈り干しにけむ
甘庶さたうきび刈り干しにけむあはれ百舌啼

く

三

とある池のほとりにて

水すまし夕日光ればしみみと跳^はねてつるめり秋の水^{みのも}面に

四

鶏頭の血のしたたれる廐うまやにも秋のあはれの見ゆる汽車みち

三月まへ穂麦のびたる畑なりきいま血のごとく鶏頭の咲く

五

柔かき光の中にあをあをと脚ふるはして啼く虫もあり

かかれとて虫の寡婦やもめは啼かざらむ鴉細こまかに啄みにけり

六

武蔵野のだんだん畑の唐辛子いまあかあかと刈り干しにけれ
あかあかと胡椒刈り干せとめどなく涙ながるる胡椒刈り干せ

父親とその子の三次ひと曰赤く胡椒刈り干せど物言はずけり

男子らは心しくしく墾^{きりばた}畑の赤き胡椒を刈り干しつくす

V
街の晩秋

一

黄なる日に鏽びし姿^{すがた}見鏡^みてりかへし人あらなくに百舌啼きしきる

二

秋の葉



いつのまに黄なる火となりちりにけむ青さいかちの小さき葉のゆ
め

三

都大路いまだゆらげる橡とちの葉に日向雨こそふりいでにけれ

午前八時すずかけの木のかげはしる電車の霜もなつかしきかな

四

あかしやの金と赤とがちるぞえな、
やはらかな秋の光にちるぞえな

ただしづかに金きんのよき葉のちりかへりいかばかり秋はかなしかる
らむ

わが友の黒く光れる瞳より恐ろしきなし秋ふけわたる



植物園小品

25. Ⅲ. 10.

午後三時過ぎ、

薄黄水仙の浅葱あさぎの新芽枯れたる芝生のなかに仕切られたる円形
或は長方形の花壇のなかに二寸ばかり萌えいづ。その幾何学的な
配列のつましさよ、風微かすかにかよふ。

水噴かぬ鏽びたる噴水の露盤より静かに滴る水滴。

温室前の厚葉シユロランの高きそよぎ。キミガヨランの長きし
だり葉に日は光り、南洋土人の頭飾の如くにうち動ゆらぐ。

植物園事務室より出で来りし、若き紳士の紺の背広に赤皮の靴
のやはらかなる、薄黄水仙のほとりをぞゆく。

異国の人来る。男は萌黄のソフトをかぶり、女は褪紅の外套を



着け、その後より鮮紅の帽かむりし二人の男女の小児爽やかに走りゆく。転づるは French か、角ぐみそめし桜の二列の並木の間の人道を、枯草の辺りを、青くして低きかなめ垣の長き徑に添ひて、ハリエニシダの花黄なる彼方へとぞゆく。日は黄にして軟かく、冷めたけれども快^{こころ}よき春の風吹く。

とある枯れたる芝生の隅に整はぬ円形を作りあまたの迎春花^{ワウパイ}の小さくして色黄なる花葉もなき枯枝に咲けり、高さは人の足もとにうち見らる。

砂敷ける徑のほとり沈丁の花冷めたき風に甘く鋭し。

少年二人カンワスを手にさげて静心なく歩みゆく、濡れたる油絵具のにはひ新し。

老緑色の小さき園標に記したる白き文字の淡青さよ。『このお
くの下に庭あり。』

暗くして青きインバネスのマワシの下に冷めたく白き指のみ見
せて黄なる蜜柑をむきつつ我はゆく……

枝ぶりよきサンシユユの花の小さくして黄なる数かぎりなき哀
愁よ、四時過ぎの日光をうけて風に戦げる。

人ごゑきこゆ、女のやさしき砂を踏む足音も……

色淡き、あるは華美なる羽織はでのちりめんのしとやかさよ、女の
一人は淡青のリボンをぞ髪につけたる。

サンシユユと径を隔てて向へるツタウルシの木の小さき黄なる
花、その枝に毛虫の繭ひとつ透きて見ゆ。

遠き下町の夕とどろき、豆腐屋のラツパ、長く曳く小さき汽笛、鉄板の音。

小鳥ちろちろと鳴く。

湿^{しめ}れる粉^{こな}つぽくして赤みある黒き土のそこに、枯れたる小草の淡き淡き乳黄色と、そのなかに萌^もえいでたる葱^{ねぎ}色の草わかばの新しき配調を見よ。仏蘭西がへりの若紳士の軽く着^つけたる粋^{いき}な背広のにほひする。

丁字形の白ペンキの二尺ばかりの立標に、W.C.と小さき横文字にて書きたる、そのつつましさに淡紫の花をすりつけて過ぎしは誰ぞ。

日の光は形円きトベラノキに遮られて空気冷^{ひや}やかに風うすく匂

ひくねれるサンザシに淡紅緑の芽は蕾み、そのもとに水仙の芽ぞ
 寸ばかり地を抽^ぬきてうち戦ぐ。とある小枝に寥^{いそ}しくして忙^{そが}しき小
 さき白粉色の蜘蛛のおこなひよ、その糸の色なき戦慄……

銃^つの音^{おと}一二発——

眼をあげよ、今、くわつと明^ありし二本の楠の梢を、サンシユユ
 の黄なる花の光を、枯草の色を、淡青きヒヤシンスの芽のにほひ
 を。

そこらに声したる人もはや去りぬ。

鳥は園の周囲^{まはり}に鳴き、園丁の鋤^ほに堀^ほりかへさるる赤土のやはら
 かなるあるかなきかの湿潤^{しめり}のなかのわかき新芽のにほひよ、冷^つめ
 たけれども力^{ちから}あり。

老緑色の足もとの小さき園標は日にそのさみしき半面をあてたる。その淡青き白き文字のかすかなる黄なる反^{てりかへし}射よ。『園内の草は自生といへども摘み取るべからず』云云。

橡の枯木のもとに画架を立てたる青年画家は静物の硝子杯と皿と水さしと醋^すゆき林檎とを描^かきくづしたる古カンワスの上に、まづ新しき樹の幹の White と Blue とを塗りはじめたる。すでにりそめたる夕日は彼の男の描けるサンシユの黄なる枝の花に、そを見る齒痛^{オレンヂ}の人の顔一面に巻きつけたる白き繃帯に、わがむく蜜柑の皮の黄橙色^{オレンヂ}にさみしく光りつつあり。わが歩みは檜の日かげより丘のはづれの小亭へ、その傍^{かたはら}の径を下りて睡蓮科の生^{ひた}ひたる小きき池のほとりへゆく。

日の光はここにて淡き黄緑となり、冷たくして透明なる水は薄らに顫へ、汚なるココア色の泥のなかに蠢めく虫ありて、水草のかげに油すこし浮く。そのうへに八つ手のやはらかなる乳金色の花穂はこの小さな領内にうらわかき貴公子の如く佇めり。

三分ののち、われはまた広き池のほとりの老緑色のベンチに腰かく。園丁来りて踏板の上に並べほしたる靴ぬぎの汚よごれたる毛をはたく、チヨコレートの如き埃立つ。

ここをまた蜜柑むきつつ日かげを厭ひて我はゆく……

Tobaccos と白く抜ける煙草の赤き紙標見ゆ、敷島を買はんとて寥しき売店に入るほどの饑ゑたる心と、ひとりあるきのなにとはなき哀愁に、日も暮れんとするさみしさよ。

また小亭のベンチの老緑色のつつましきまでのなつかしさに一
人^{とり}ゆきて休憩^{やす}みたる十分ほどの静けさは独身のわかき男ならでは
味ひ知らぬ憂愁の境ぞかし。この間に華美なる姿して金縁の眼鏡
かけたる Blue-Stocking の輩二人三人淡紅の梅花のもとをゆく。

肉色のクリーム^の如き梅の花は厭ふべし。かのわかき女の冷めた
き白歯と、はしたなき English の会話とは、ことに興なし。我はた
だ花下の若草の上を日光の匍ひ来りてかなたの小さきベンチの脚
に射せる淡黄緑のあるかなきかのかげのみを見つめたり。

マチ擦^すれば火は風に消えて巻煙草のけむり一すぢのぼるほどに
さみしき鐘は鳴る——盲啞院晚饗の鐘。

小石踏みつつ後を通る紳士の右の手にもてる新聞紙の包はや薄

青し。

太く、細き汽笛……新築中の槌の音……街の小児らの声……わが遂に歩み入る竹林の青さ、日かげは灑されて新しく、わがインバネスに、ノートの罫に、径を超えて空木の幹うつぎにて衰へ、キンギンボク、毒ウツギの青き葉は暮れやらぬ陰影のなかにありて、小砂利のあかりに鋭く嘆く。

猫柳のぼやぼやは銀紫にして、その下の廃れたる池の面には沈まんとする太陽の半円浮び、そが黄にして赤き光薄れ揺らぎつつ青みを帯べる銀の冷たさつめに拡がる。

とうふ豆腐イ……豆腐イ……

テウテ胡桃くるみの淡紫の幹——坂をのぼりきりたるところより貯蔵

庫（柑子類の植物を入れたる）の煉瓦壁見ゆ。何時も何時もわが歩みの目標となる軟かなるその壁の色はまだ芽にいでぬ薬草のにほひ痛き畑のあなたに暮れゆかんとす。

植物園の鐘鳴る。

事務室の辺より四十ばかりの憐れなる女淡青の風呂敷包を背に負ひ、手には粗末なる蜜柑函を持ちて歩み来る、木材のにほひ空虚なる函に新し、この女西洋館前のだらだら坂を下りゆく時その淡黄にて力なき壁の夕日を振りかへる。彼処には簇立せるシユロランの高き幹黒く、硝子窓にカーテン薄汚なく、入口の扉は半ば斜に開きたり。藁づとの褪めたる色、ハビビヤクシンの傾斜面の暗青色の静止——短艇ボートの船腹の如き雲灰白色の別館の上に薄れん

とし、ヒマラヤ杉ひとり早春の風に戦ぐ、大きな魚の青き骨のごとく。

そのかげよりまた四十前後の女園丁三人手拭の頬冠りして出て来る、坂を下るとき、そのなかの素足の女半ば青きシラガミススギの蔭にゆきて、青き弁当の包を取り出しながら連のあとより急ぎゆく。

われもまた出で去る。

入口の看守はさみしげに座り、ユヅリハの葉柄の赤きが暮れんとして、閉さぬくぐりの間よりかなたの街の薄ら明をさしのぞき……さしのぞく……

春を待つ間

I 冬のさきがけ

一

ふくらなる羽毛襟^{ボア}卷^アのにほひを新らしむ十一月の朝のあひびき

二

遠々しくなりし女のもとへ二首



いと長き街のはづれの君が住む三丁目より冬は来にけむ

しみじみと人の涙を流すときわれも泣かまし鳥のごとくに

三

いちはやく冬のマントをひきまはし銀座いそげばふる霰みぞれかな

電でんちゆう柱ちゆうの白き堤てい子しにいと細く雨はそそげり冬きたるらし

四

たましひ
 霊の薄き瞳を見るごとし時雨の朝の小さき自鳴鐘
 めざまし

なつかしき憎き女のうしろでをほのかに見せて雨のふりいづ

五

男ぶりには惚れんばな、

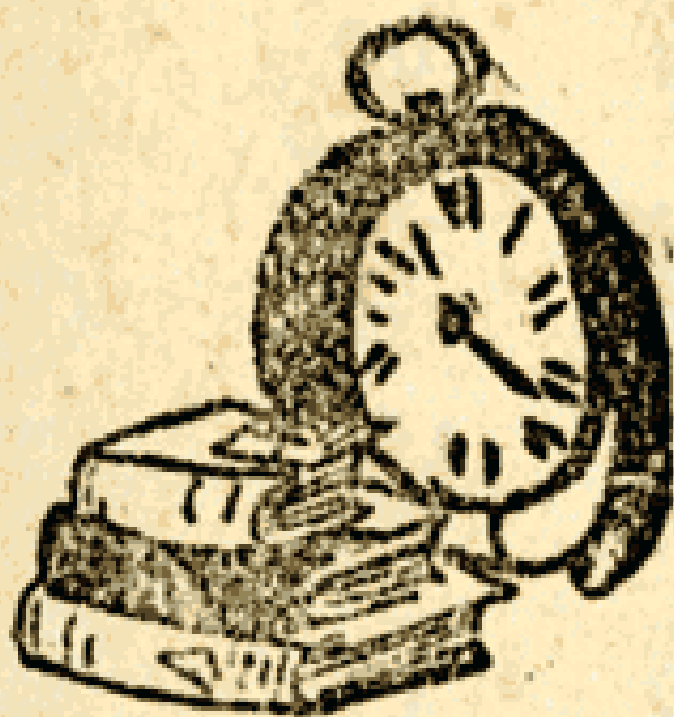
煙草入の銀かな具がそれが因縁たい

煙草入の銀のかな具のつめたさがいとど身に染むパチと鳴らせど

六

夜をこめて風見^{かざみ}のきしりさびしさの身に染^しむ空となり^{なり}にけるかな

さいかちの青さいかちの実となりて鳴りてさやげば雪ふりきたる



Ⅱ 戲奴

一

一月や道化帽子の色あかき一寸坊の小屋に雪ふる

二

かなしや雪のふる日も道化ものもんどりうつとよく馴れにけり



ほこりかにとんぼがへりをしてのくるわかき道化に涙あらずな

三

夜^{よる}おそくひとりひそかに帰りきて道化衣裳を脱^とる男あり

感冒^{かぜ}なひきそよ朝は冷^{つめ}たき鼻の尖^{さき}ひとり凍^{こげ}えて春を待つ間に

Ⅲ 雪

一

寂しさに赤き硝子を透かし見つちらちらと雪のふりしきる見ゆ

二

厨^{くりやめ}女の白き前^{まへ}掛^{かけ}しみじみと青葱の香の染^しみて雪ふる

つつましき朝の食事に香をおくる小雨に濡れし^{さふらん}泊^{さふらん}芙藍の花

三

横浜埠頭所見

つや青き支那の料理人^{コック}が面^{つら}がまへ憎しとばかりうつ霰かな

腰ひくき浜のガイドが襟にさす温室^{むろ}咲きの花の色の赤さよ

四

ぬくぬくと双^{もろて}手さし入れ別れゆくマフの毛いろの黒き雪の日

薄青き路上の雪よあまつさへ日てりかがやき人妻のゆく

五

君かへす朝の舗石しきいしさくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ

六

河岸の明け暮れ

猫柳薄紫に光るなり雪つもる朝の河岸の景色に

屋根の雪屋根をすべると三味線の棹拭きかけて泣く女かな

七

木挽町の河岸の夜ふけに

雪ふるひとりゆく夜の松の葉に忍びがへしに雪ふりしきる

八

チヨコレート
古聿嗅ぎて君待つ雪の夜は湯サモワル沸の湯気も静ころなし

ああ冬の夜ひとり汝がたく暖ストーブ炉の静ころなき吐息おぼゆる

九

ひとよのつねの
恋となあはれおもひたまひそ

雪の夜の紅^{あか}きゐろりにすり寄りつ人妻とわれと何とすべけむ

十

悪夢のあとの朝明

狂ほしき夜は明けにけり浅みどりキヤベツ畑に雪はふりつつ

雪ふるキヤベツを切ると小男が段々畑をのぼりゆく見ゆ

十一

わかき日は赤き胡椒の実のごとくかなしや雪にうづもれにけり

IV 早春

一

その翌朝^{よくあさ}おしろいやけの素顔吹く水仙の芽の青きそよかぜ

二

四十路びと面^{おも}さみしらに歩みよる二月の朝の洎^{さふらん}芙藍の花

三

つつましきひとりあるきのさみしさにあぜ菜の香すら知りそめし
かな

あはれなるキツネノボタン春くれば水に馴れつつ物をこそおもへ

四

みじめなるエレン夫人が職^{なりはひ}業のミシンの針にしみる雨かな

名なし草^{あか}紅く小^{ちひ}さく咲きそめぬみすぎ世^{ひなた}すぎの窓の日向に

五

春が来た。黄色なサンシユユの梢に、
沈丁に、針えに
しだの苦き尖りに

沈丁の薄らあかりにたよりなく齒の痛むこそかなしかりけれ



六

猫柳春の暗示のそことなくをどる河辺を泣きてもとほる

猫柳ものをおもへば猫の毛をなづるごこちによき風も吹く

七

細葱の春の光をかなしむと真昼しみに小犬つるめる

野に來^{きた}れば遠きキヤベツの畑をゆく空ぐるまの音もなつかしきか
な

八

すずろぐは葱か、キヤベツか、
きさらぎのそことなき春の暗示よ

ふくれたるあかき手をあて 婢女^{はしため}が泣ける厨^{くりや}に春は光れり

V 寂しきどち

一

かりそめにおん身慕ふといふ時もよき俳優^{わざをぎ}は涙ながしぬ

わが愛^めづる小さく陋^{さも}しくいぢらしき白栗鼠^{しろりす}のごと泣くは誰ぞや

泣きたまふな、あまりにさびし

いざやわれとんぼがへりもしてのけむ涙ながしそ君はかなしき

二

わがどちよ寂しきどちよつねに見て思へばくるし泣かざれば憂^うし

おのがじし弱きけふ日の涙をばはふり落して鳴ける小鳥ら

寂しさのこのもかのもにへりくだり泣けば心の響きこゆる

涙してひとをいたはるよそ人のあつき心をわれに持たしめ

三

つかのまも君を見ずては抑えがたきかなしき狐つきそめにけり

四

歇私^{ヒステリ}的^ー里の冬の発作のさみしさのうす雪となりふる雨となり

冷^{ひや}やかに薄^{まぶた}き眶をしばたたく人にな馴れそ山の春の鳥

五

芥子のたねひとり掌^てにのせきらきらと蒔けば心の五月^{さつき}忍ばゆ

白き露台

I
春愁

一

わかき日の路上にて

歎けとていまはた目白僧園の夕の鐘も鳴りいでにけむ
ゆふべ

二



ソフイー、けふもまた気づかはしさうなお前の瞳に薄
い雲がゆく、薄い雲がゆく

春はもや静ころなし歇私^{ヒステリー}的里の人妻の面^{かほ}のさみしきがほど

浅草聖天横丁

君見ずば心地死ぬべし寢室^{しんしつ}の桜あまりに白きたそがれ

四

私は思ふ、あのうらわかい天才のラムボオを、而して
悲しい宝石商人の息づかひを、心を

アーク燈いとなつかしく美しくしき宝石商の店に春ゆく

美しく小さく冷^{つめ}たき緑^{エメラルド}玉その玉^す掬^{かな}らば哀しからまし

いと憎き宝石商の店を出で泣かむとすれば雪ふりしきる

五

温かに洋傘かさの尖さきもてうち散らす 毛きんぼうげ 苳げこそ春はかなしき

しみじみと二人泣ふたりくべく椅子の上の青き蜥蜴をはねのけにけり

六

定ぢやうさい 齋さいの軋きしみせはしく橋わたる江戸の横網よこあみ鶯の啼く

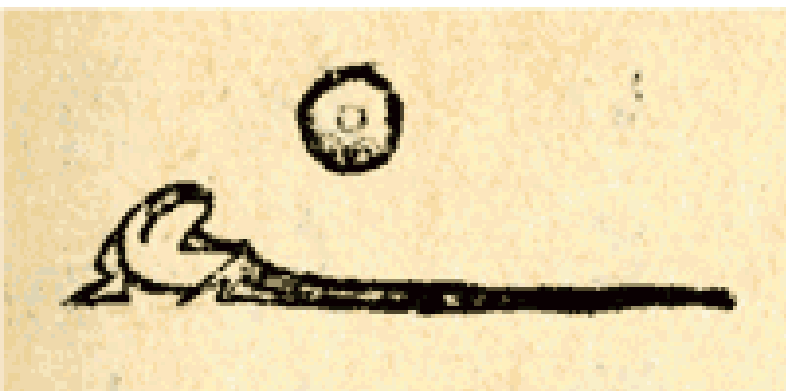
桜、さくら、街のさくらにいと白く塵埃^{ほこり}吹きつけけふも暮れにけり

七

鐸^{すず}鳴らす路^ル加^カ病院の遅^{おそ}ざくら春もいましかをはりなるらむ

Ⅱ 夜を待つ人

一



思ひ出の赤き糸よ、夕暮の薄らあかりにたゞたぐれ、
静ころなく

やはらかに赤き糸をたぐるとき夕とどろきの遠くきこゆる

泣かむとし赤き硝子に背を向けつ夕は迫る窓の内部に^{ゆふべ}_{うちら}

いつしかと身は窓掛に置く塵の白きがごとくも物さびてける

三

かろがろと女腰かけなにやらむ花あかき窓に物思ひ居り

よしやあしや君が銀座の入日ぞらほのかに暮れて夜となりける

四

つくづくと昼のつかれをうらがへしけふもラムプを点すなりけり
とも

編みさしの赤き毛糸にしみじみと針を刺す時こほろぎの鳴く

五

鳴りひびく心甲斐絹を着るごとしさなりさやさやかかる夕に

これやこの絹のもつれをときほぐしほのかに夜を待つよるすべもがな



六

露西亜の白夜にはあらねども

かなしきは気まぐれごころ宵のまに朝の風たちかなかなの啼く

松の葉の松の木の間をちりきたるそのごとほそきかなしみの来る

Ⅲ なまけもの

一

なまけものなまけてあればこおひいのゆるきゆげさへもたへがた
きかな

二

ほれぼれと歌ふにしくはなかるらむおもへば憂^うしや涙ながるる

ものおもふわかき男の息づかひそなたも知るやさるひあの花

三

なまけもの昼は昼とてそこなきびんつけの香にも涙してけれ
へら鷺の卵かへすとなまけものなまけはてたるわれならなくに
おづおづとわかきむすめを預れる人のごとくに青ざめて居り

ひとりゐて罪あり

このおもひ人が見たらば墓ひきとなれ雨が降つたらへら鷺となれ

四

わがゆけば男のにほひちかよると含はにかみさう羞草の葉を閉づるかも

ものおもへば肩のうしろにこそばゆきわかきをなごのといきこそ
すれ

五

夕暮のあまり赤さになまけもの
とんぼがへれば啼くほととぎす

IV
女友どち

一

ゆくりなく庚申かうしん薔薇ばらの花咲きぬ
君を忘れて幾いくとせ年か経し

二

うらうらと二人^{ふたり}さしより泣いてゐしその日をいまになすよしもが
な

ただひと目君を見しゆゑ三味線の絃^{いと}よりほそく顫ひそめにし

三

才高きある夫人に

ほれぼれと君になづきしそのころはや裏切りてゆくゑしらずも

四

嗅ぎなれしかのおしろいのいや薄く冷たき情忘られなくに
つめ なさけ

五

女は白き眼をひきあけてひたぶるに寄り添ふ、淫らに
も若く美しく

どくだみの花のにほひを思ふとき青みて迫る君がまなざし

六

あるあはれなる女に

いつとなく親しむとなく寄るとなく馴れし情も忘られなくに
なさけ

七

偽おほく而もなほ美しき女ありけり

その女消えさりにけり

くちびるの紅あかく素顔のいと蒼き女手品師君去りにけり

V 白き露台

一

ひとたび別れて

かはたれの白き露台に出でて見つわがおもふ人はいつち去にけむ

二

君には似つれ、

見も知らぬ少女なりけり

三

仏蘭西のみやび少女がさしかざす
忽^{わすれなぐさ}忘草の空^{そら}いろの花

かなしみは出窓のごとし連理れんりきう草夜にとりあつめそよ微かぜぞ吹く

にほやかに君がよき夜ぞふりそそぐ白き露台の矢ぐるまの花

四

その君はいづこにありや、

はつ夏の空も薰りぬ

匂よき宵の口ベリヤ朝の芥子小窓に据ゑて忍ぶ日は来ぬ

五

姿見の中の草生よ

老いほけしたんぽぽも飛ぶ

昨日^{きのふ}君がありしところいまは赤く鏡にうつり虞美人^{ひなげし}草のさく

六

鳩よ鳩よひとりぽつちのわが鳩よ

七

煩惱の赤き花よりやはらかに煙る草生くさぶへ鳩飛びうつる

とまり木の鳥のこころよ

夕かけて白き小鳥のものおもひ木にとまるこそさみしかりけれ

八

空いろよりすこし濃きロベリヤの花はほのかに小さく



して、しかも数かたまりて瞳をひらく。悲しき日その
花をながめて

く 空いろのつゆのいのちのそれとなく消^けなましものを口ベリヤのさ

感覚の小函

いつの日か懐かしいと思つて小窓に据ゑて置いた忽忘草も、青
ダイヤモンドフラワー
 い金剛石花も、空色のロベリヤももうみんな枯れてしまつ
 て、小石川の植物園に新たに茴香の花の咲く時節が来た。梧桐の
 かげに客待をしてゐる人力車夫にも、銀座の横町に荷を下すバナ
 ナ売の半纏にも硝子屋の白い斜面の日覆ひよけにも、愈夏らしい強い光
 が照りつけて、早や日中から張りわたした虫売の露店の薄い天幕テント
 のかげにも幽かに鈴虫が鳴きはじめる。なつかしい、然し何とな
 く寂しいやるせない夏、夏は丁度白い服をきたヒステリーの看護
 婦の夕方の露バルコン台に出て吹き鳴らすはるもにかのやうに何時も私
 に新らしい哀傷のたねを蒔かしめる。

敬虔な私のいまの心持は軽薄なワイルドの美くしい波斯模様の



色合から薄明りの中に翹ばたく白い羽虫の煙のやうなロウデンバツハの神経に移つてゆく。静かな夏の日の独居ひとりゐが私の心をまた小さな仙人掌さぼてんの刺のうへに留らせ、黄色い名も知れぬ三ツの花のうへにしみじみと飛びうつらす。このふた月あまり私はただ静かに自分自身の心を観照して、燃え狂つた煩惱の花壇から幽かな銀色の虫の音を拾つてゆくより外に騒がしい周囲の如何なる事情からも禍される事が無くて過ぎた。私の目下の一大事は驕奢な貴公子の生活を羨む事でもなく、また華やかなバンドマンの歌劇を觀にゆくことでもない。さうして無論流行はやりの背広を着てお馴染みのカツフエににが苦い珈琲を啜り、リキユールの冷たいさかづきに唇をあつることもない、おしろいの匂と酒と友人とに離れてからも

う既に久しい時が経つた。私はただ独り^{うすあかり}薄明の窓^{まど}側に坐つて縊^よれからんだ神経の絹糸のもつれをときほぐし、或は冷たい硝子のフラスコのそのたよりない皮膚の上をつつましやかに匍ひ廻る小さな細蟻の感覚に心をあつめ、いかにしてまた西洋葵の花弁の上に悲しい一日の歎きをとんぼがへりさせるかといふ、たつたそれだけの謙遜な心に真実私自身を洗練して、品の高い陰影の微光のなかに幽かに思想の芽をひらく、譬へやうもないその美しい歓会の時の来るのを待つてゐる。

近代の傷^{いた}ましい悩みからぬけいでて純なる小鳥の心にたちかへれよ、たゞ自らを偽るな、涙を惜しめ、而して美しい小さな冷^{つめ}たい緑玉^{エメロイド}のごとく常に悲しい光に息づけよ。若しわれと己れ自身

を偽つたなら、白い鷺鳥はひきがへる蟾蜍となり、黄金の匙は怪しいニ
 ツケルのナイフとなり、酒は酢となり、きりぎりすはみづ蚯蚓となり、
 恋人の美くしい眸はひとみ忽ち賤しい波羅門の腕環にはめられて一生を
 浅ましいあぶらあせ脂汗と怪しい畜類の匂に汚されて了うであらう。

暑い夏の日に涙をながし、さうして身のうちによそならぬわが
 汗の臭ひを嗅ぎ、なつかしい自分の命を、人よ、おまへ汝がしみじみと
 思ひ知りえた時、微かな夏と心との感覚をわれとわが指さきによ
 せあつめて浮彫の寂しい小さな白プラチナ金の函のなかに入れ、而して
 蓋をふたかたく閉して、幽かな薄明の中にさし置けよ。而して寂しさ
 に堪へかねた時、その上に薄いリキユグラスをのせ、強いウキス
 キーの少量を注げ、その黄色の漣が幽かな陰影の刺戟を顫はせて

プラチナ

白金の微光に投げかくなるとき封じられたすべての哀傷が恰も冷たい鍼^{はりみ}医の銀針のやうに、或は黄緑、青紅、様々の光沢と信実ある結晶の涙を湛へた美しい宝石の音譜のやうに、初めて底の底から洗練され命づけられた感覚の啜泣きを、幽かに幽かに不可思議な夜天のパノラマに伝へるであらう。

私はうらわかい宝石商の涙をよく知つてゐる。さうしてあの天才のラムボオを嗟かして寂しい商人の群に駆り立てた怪しい宝石の心を、誘惑を、譬へやうもない美しくいその魅力を悲^{かなしみ}愁をよく知つてゐる。さうしてまたオスカアワイルドやヴェルレエヌを牢獄の底に泣かしめた悲しい耽美の心意気をも、青玉の露をふり落す葦の葉の囁きをも、カアネエシヨンの花を恐るる小さな緑蛇

の心をも、私はまたよく知つてゐる。

愛人の胸から貰つた小さな青玉の音色は絶えず新らしい私の涙に濡らされてりんりんとあるかなきかに鳴り響く。而して昼は幽かに、夜は清く、朝は寂しい自鳴鐘のやうに時雨の霊をそそのかしてほのかに白芥子の花に纏る。ともすれば置き忘れたその青玉の眸は微かなタナグラ人形の陰影から小さな玉虫の眼のやうに顫へて、絶えず移り気な私の心を気遣はしさうに熟視める。而してオペラの幕あきの合図の電鈴のやうにとりとめもなく逍遙うてゐる私の夕暮の感覚をひき戻す。

夏、夏、夏の薄暮は何時もアーク燈の光のやうに薄紫の涙に濡れ潤つたやるせない寂しい微光の氛囲氣を私の心の周圍にかたち

づくる。而して今日のとりとめもない感想も微かな白い羽虫となつてその陰影の中に閃めきながら、鳴り響く青玉の音色も暮れてゆく……孱弱な心、繊細な絹糸のもつれをかたよせて、私はまた久し振りに、あの銀座の青い柳のかげの白い瀟洒な喫茶店の椅子に寂しい孤独の身をなげかけて、せめては冷たい一杯のアイスクリームにさらに悲しい哀傷の新らしさも味つて見やうかしら、それとも例^{いつも}日のやうに名も知れぬ黄色い三つの花の上に小さな私の霊をあづけて、たつた独りで何時までも何時までも泣いてゐやうかしら。それとも私の小さな涙の玉を赤い西洋葵の上に一踊りとなんばかへりをさして何がなしに笑つて見やうか。……ああ、とうとう日が暮れて、鳴り響く青玉の音色も暮れてゆく。

(Echizenbori, 28. V. 1912.)

哀傷篇

罪びとソフイーに贈る

「三八七」番

I
哀傷篇序歌

一

ひとすぢの香かうの煙のふたいろにうちなびきつつなげくわが恋

二

自棄二首



あだごころ君をたのみて身を滅おとす媚薬の風に吹かれけるかな

哀かなしくも君に思はれこの惜しくきよきいのちを投げやりにする

三

花園の別れ六首

君と見て一期いちごの別れする時もダリヤは紅あかしダリヤは紅あかし

君がため一期いちごの迷ひする時は身のゆき暮れて飛ぶこちする

哀かなしければ君をこよなく打ちやうちやく擲やくすあまりにダリヤ紅あかく恨めし

紅くれなゐの天竺牡丹ちつと見て懷妊みづこりたりと泣きてけらずや

身の上の一大事とはなりにけり紅あかきダリヤよ紅あかきダリヤよ

われら終に紅あかきダリヤを喰ひつくす虫の群かと涙ながすも

Ⅱ 哀傷篇

一

悲しき日苦しき日七月六日

鳴きほれて逃ぐるすべさへ知らぬ鳥その鳥のごと捕へられにけり

二

かなしきは人間のみち牢獄^{ひとや}みち馬車の軋^{きし}みてゆく礫^{こいし}道^{みち}

眼をつぶれど今も見えたる草むらの麦稈帽は光るなりけり

馬車霞が関を過ぐ

大空に円き日輪血のごとし禍^{まが}つ監獄^{ひとや}にわれ墮^おちてゆく

胸のくるしさ空地あきちの落日いりひあかあかとただかがやけり胸のくるしさ

まざまざとこの黒馬車のかたすみに身を伏せて君の泣けるならず
や

夕日あかく馬のしりへの金網かなあみを透きてじりじり照りつけにけり

向ふ通るは清十郎ぢやないか

笠がよう似た菅笠が

夏祭わつしよわつしよとかつぎゆく街まちの神輿みこしが遠くきこゆる

泣きそ泣きそあかき外との面もの軒したの廻り燈籠に灯ひが点つきにけり

三

うれしや監獄にも花はありけり

草の中にも赤くちひさく

しみじみと涙して入る君とわれ監獄^{ひとや}の庭の爪紅^{つまぐれ}の花

女はとく庭に下りて顫へゐたり、数珠つなぎの男らは
その後より、ひとりひとりに跟けつつ匍ひいでて紅き
爪紅のそばにうち顫へゐたり、われ最後に飛び下りん
と身構へて、ふとをかしくなりぬ、帯に縄かけられた
れば前の奴のお尻がわが身体を強く曳く、面白きかな、

悲しみ極まれるわが心、この時ふいと戯けてやつこ
らのさといふ気になりぬ

やつこらさと飛んで下^おりれば吾^わ妹^が子^もがいぢらしやじつと此^こ方^ち向^ち
いて居り

同じく二首

編笠をすこしかたむけよき君はなほ紅^{あか}き花に見入るなりけり

鳳仙花紅^{あか}く咲ければ女子もかくてかなしく美しくあれよ

四

監房の第一夜

この心いよはだかとなり^にけり涙な^がるる涙な^がるる

罪びとは罪びとゆゑになほいとしか^なしいぢらしあきらめられず

五

ふたつなき阿古屋の玉をかき抱きわれ泣きほれて監獄^{ひとや}に居たり

どん底の底の監獄^{ひとや}にさしきたる天^{あま}つ光に身は濡れにけり

テテツプツプ

弥惣次ケツケ

日もすがらひと日監獄ひとやの鳩ぽつぽつぽつぽつぽつと物おもはする

* 柳河の童謡、テテツプツプは鳩ぽつぽつのこと

二日経て弟面会に來りければ

監獄ひとやにも鳳仙花咲けりいと紅あかしとこの弟に言ひ告げやらむ

母びとは悲しくませば鳳仙花せめて紅あかしと言ひ告げやらむ

七

監獄の庭に引き出されて、ある時

いつまでか日は東よりのぼるらむ昨日きのふに同じ赤き花咲く

あはれなる獄卒どもが匍ひかがみあか紅きダリヤの毛虫とる見ゆ

太陽のもとに許されて尿するは
うれしきかな楽しきかな

狂人^{きちがひ}の赤き花見て叫ぶときわれらしみじみ出て尿^{いばり}する

赤き花見つつ涙^{なみだ}し頑^{かたく}なのこの若ものが物言はぬかも

八

バリカンの光うごけばしくしくと痛^{いた}き頭^{かしら}のやるせなきかなや

バリカンに頭^{かしら}あづけてしくしくとつるむ羽虫を見詰めてゐたり

九

真昼の監房にてある時

おのれ紅^{あか}き水蜜桃の汁^{つゆ}をもて顔を描^かかむぞ泣^なける汝^{なれ}が顔

タされば入日血のごとさしつくる監獄^{ひとや}うれしや飯^まを食^たべてむ

またある時

驚きてふと見つむればかなしきかわが足の指も泣けるなりけり

わが^{ふぐり}辜丸つよくつかまば死ぬべきか^き訊けば心がこけ笑ひする

^{たは}淫れ歌うたひつくして泣くなめり忘れ難かりあきらめられず

殺人犯隣にあり

猫のごと首絞められて死ぬといふことがをかしき爪つまぐれ紅の咲く

監獄にて子を生みし女ありけり
いかなる罪業のめぐりなるらむ

恐ろしくおのれ死なむとつきつめぬいきいきとまたも赤子啼き啼

く

夕されば火のつくごとく君恋し命いとほしあきらめられず

十

夕暮より夜にかけて

曇り日の桐の梢に飛び来りかなかな蛸鳴けば人の恋しき

市ヶ谷の逢魔^{あふま}が時となり
にけりあかんぼの泣く梟の啼く

夜となりぬのうまくさん
まんだばさらだせんだ
まかろしやだとわが父の泣く声のきこゆる

梟はいまか眼玉^{めだま}を開くらむ
ごろすけほうほうごろすけ
ほうほう

深夜二首

たれこめて深きねむりに墮^おつる時わが傍^{そば}に來り寝る女あり

君もなほ死なずしありけむさめざめと夜の間に^ま見えて涙を流す

十一

裁判の日、七月十六日

一 ひとつら列に手錠はめられ十二人涙ながせば鳩ぽつぽ飛ぶ

鳩よ鳩よをかしからずや囚 めしうど人の「三八七」さんはちしちが涙ながせる

十二

法廷へのゆくみちにて

向日葵向日葵囚人馬車の隙間 ひぐるまより見えてくるくるかがやきにけれ すきま

十三

すべてなつかしすべてなつかし

鳳仙花われ礼ゐやすればむくつけき看守もうれしや目礼したり

鳳仙花よ監獄ひとやにも馴れ罪にも馴れ囚人しうじんにさへも馴れむとするか

十四

許されたり許されたり

監獄^{ひとや}いでぬ重き木蓋^{きぶた}をはねのけて林檎^{りんご}函^{はこ}よりをどるここに

監獄^{ひとや}いでぬ走れ人力車^{じんりき}よ走れ街^{まち}にまんまろなお月さまがあがる

監獄^{ひとや}いでてじつと顫へて噛む林檎林檎さくさく身に染^しみわたる

くれなるの濃きが別れとなり^{かんごく}にけり監獄の花爪^{つまぐれ}紅の花

Ⅲ 続哀傷篇

一

空見ると強く大きく見はりたるわが^{つぶ}円ら眼に涙たまるも

二

烏羽玉ぬばたまの天竺牡丹咲きにけり男手に取り涙を流す

烏羽玉の黒きダリヤにあまつさへ日の照りそそぐ日の照りそそぐ

三

お岩稲荷にゆきて

あまつさへ夾竹桃の花あかく咲きにけらずやわかき男よ

四

木更津へ渡る。海浜に出でて

あまりに悲しかりければ

いと酔^すき赤き柘榴^{ざくろ}をひきちぎり日の光る海に投げつけにけり

松川といふ旅館に泊りぬ

白き猫あまたゐたりけり

白き猫あまたゐねむりわがやどの晩夏ばんかの正午まひる近まりにけり

驚きて猫の熟視みつむる赤トマトわが投げつけしその赤トマト

あかあかと騒^{さわ}ぎ廻りそ人力車夕日に坐り泣く男あり

またぞろふさぎの虫奴^めがつ^めのるなり黄なる鶏頭赤き鶏頭

六

やはらかにロンドンテニースの球光^{たま}る公園に来てけふもおもへる

草の葉に^{すべ}にりちろめく青^{あを}蜥蜴^{とかげ}その児悲しも夕日は光る

七

くつわ虫を蟬かと思うた、

ひとりひるねの宵のねざめに

かなしければ昼と夜とのけぢめなくつわ虫鳴くかなかな蛸の鳴く

八

曇り日の朝の瓦の見はるかしを鳩歩み居れりさみしきか鳩よ

電線^{はりかね}に雀とまりてつるみたり悲しかりけりまた飛んでけり

九

心心赤き実となり枝につく鴉食^はまむとすはぢぎれむとす

暴風雨来りぬ面白きかな面白きかな

柿の赤き実隣家のへだて飛び越えてころげ廻れり暴風雨吹け吹け

十

浅草にて

電線に鳶の子が啼き月の夜に赤い燈が点くびいひよろろよ

なになれば猫の児のごと泣くならむ鳶とまれり電線の上に

十一

河岸あるき

横網よこあみに一銭蒸汽近づくと廻るうねりも君おもはする

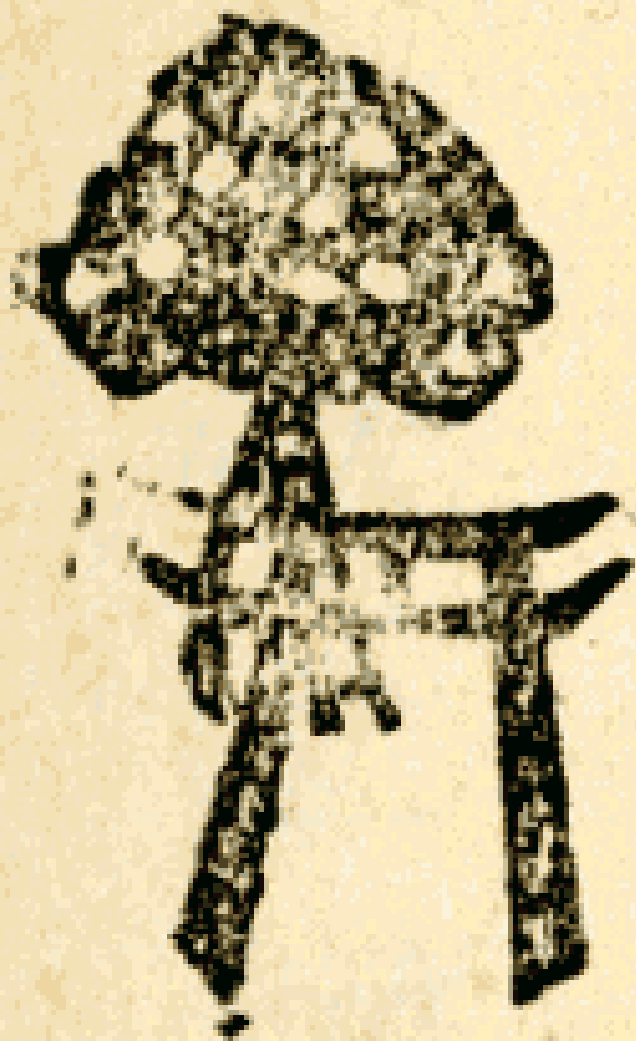
見れば乞食かたゐは腐れ赤茄トマト子トをかいつかみひたぶる泣きて食くらふなりけり

小犬二匹石炭舟ふねのふなべりを鳴けり狂へり夜に叫び居り

ぬば玉のくらき水の面もを奥ふかく石炭舟のすべりゆきにけり

十二

冬来る



十一月は冬の初めてきたるとき故^く国^{くに}の朱^ザ欒^{ボン}の黄にみのるとき
唳々とひとすぢの水吹きいでたり冬の日比谷の鶴のくちばし

IV 哀傷終篇

一

かなしみに顫へ新たにはぢけちるわれはキヤベツの球^{たま}ならなくに

二

くるしくるし堪へがたし

わが心ただひとすぢとなりにけり笛を吹け吹けとんぼがへれよ
ひとをどりひやるろと吹けば笛の音もひやるろふれうと鳴るがい
としさ

三

思ひ出のひとつふたつ

代々木の青^{あをか}櫨^しがもとに飛びありく白栗鼠^{しろりす}のごとく二人^{ふたり}抱きし

春くれば白く小^{ちひ}さき足の指かはゆしと君を抱きけるかな

手にぎりてかたみに憎み^{じゅんさい}蓴菜^{みどり}の銀の水^{みどり}泥を見つめつるかな

死ぬばかり白き桜に針ふるとひまなく雨をおそれつつ寝ぬ

蠟燭をひとつ点^{とも}して恐ろしきわれらが閨をうかがひにけり

その翌朝^{よくあさ}君とわが見て慄^{ふる}へたる一寸坊が赤き足芸

四

旧歎とどめがたし生はかたく死はやすし

ひなげしのあかき五月さつきにせめてわれ君刺し殺し死ぬるべかりき

五

男泣きに泣かむとすれば竜胆りんだうがわが足もとに光りて居たり

このかなしき胸のそこひゆこみあぐるくるめきの玉は鉄の玉かも

六

来て見れば監獄署の裏に日は赤くテテツプツプと鳩の飛べるも

囚人の泣く声か、拷問の叫びか

と見れば監獄署裏の草空地くさあきちにぶらんこの環くわんのきしるなりけり

七

野辺あるき

氷閉ぢ野菜つめたき冬のみちゆけどもゆけども人に逢はなく

煤^{すすけむり}烟 たなびくもとに葛^{かつしか}飾の青菜畑ははるばると見ゆ

夜ふけて

ぐろきしにあつかみつぶせばしみじみとから紅くれなゐのいのち忍ばゆ

時計の針いIとIちとにきた来るときするどく君をおもひつめにき

九

母の云へらく

どれどれ春の支度にかかりませう紅^{あか}い椿が咲いたぞなもし

十

あかんぼを黒き猫来て食みしといふ恐ろしき世にわれも飯^{いひ}食む

犬が啼き居り乾^{ほしぐさ}草のなかにやはらく首突き入れて犬が啼き居り

十一

ひもじきかなひもじきかな

わが心はいたしいたしするどにさみし

吾が心よ夕さりくれば蠟燭に火の点くごとしひもじかりけり

白猫

いかにも悩ましい晩だつたと思つた。歩^{ある}行いてゐるとまるで自分の身体^{からだ}が蒼白いセンジュアルな発光の中にひきつつまれて匂のふかい麝香猫か何ぞのやうに心までが腐爛してゆくかとさへ思はれた。

霧、霧、濃密な深い麻醉の雰囲氣に新鮮な瓦斯が光り、電燈がぼやけ、アーク燈が濡れた果実のやうに香氣を放ち、葉柳のかけに、舗石に、店々の飾^{シヤウウインドウ}窓に、さまざまの光沢と陰影とが入り乱れて息づかひ深く霧が愈ふりそそぐ。行きかふ人かげ、馬車や自働車の燈^ひのくるめき、電車の鐸^{すず}——銀座の二丁目から三丁目にかけて例^{いづ}も見馴れた浅はかな喧騒の市街が今はぼかされ搔き消されて、ただ不可思議な恍惚と濃厚な幻感とが恰度水底のキネ



オラマのやうに現出する。

その底を私は歩行^{ある}いてゐた。たとへ無罪になつたにせよ、かりにも人妻と牢獄に堕ちた私、敗徳者、——私は深い心に泣き乍ら幻想の燈^ひかげに弱つた身体^{からだ}を勞つてゆく、潤^{しめ}つた霧がそこにもここに重い層をなして私の身邊を圧へつける。夏帽子の麦稈、啣えたパイプの火、冷たい目、耳、終^{しま}ひには背後^{うしろ}から肩に手をかけ、咽喉を絞め、剩へ甘いものの腐れた匂さへ病ましい両の頬つぺたに吹きつける。而も耻と悲哀に弾ぢぎれさうな胸を抑えて、怖^{おづ／＼}々と人目を忍んで歩^あるいてゆく切りつめた今の自分の心にも何時しか忘れはてた淫蕩な罪の記憶が泣かむばかりに芽ざしてくる浅間しき。白い霧の中に立つて振り返ると、白い尻尾でも動くや

うに足元から怪しげな影が逃げてゆく、向き直つてそつと歩み出すと重い霧の層までが又ふうわりと後から白くからみつく。真白な獣けもの、私は顫へて自分の身体がさうした陋さもしい不思議な白い獣けものに変化してゆくのではないかと思つた。苦しい、苦しい、まるで獣芝居に出てくる白猫の役者のやうに初めは白い毛皮の身のまはりあざわらを嘲笑つあしつてゐた人間の浮かれ心までが、遂には真実に淫逸な四よ足獣の悩ましい悲念に歸つてゆくのではないかとさへ思はれる位、霧は怪しくふりそそいでくる。私は心の心に泣きながら、痛さに腫れた乳の上をしつかと抑えて、折々不気味な若い白痴の女のやうに自分の背後うしろを振り返つた。そのうちに何時の間にやら重いたどたどしい足どりが泥酔漢よいどれめいて来て、時とするとその痛い

乳の上から真白な畜生の手でもふいと飛び出しさうなそんな気がしてただもう恐ろしく、抑えては引つ込ませ、抑えては引つ込ませ、益々深い濃霧の中をあてどもなくまぎれ込んで了ふのであつたが……。

だがもう、時が過ぎた。

夜が更け、空が霽れ、蒼褪めはてた経験の貴さと冷たい靈性のなやみを染々と身に嗅ぎわけて、哀傷のけものは今深い闇のそこひからびやうびやうと声を秘めて鳴き続ける。^{ひそ}将に午前二時半、夜明前三時間、拭きすました紫檀の机に鏡を立て、つくづくと陰しくなつて了つたわれとわが顔をちつと凝視^{みつ}めてゐた私は心の底

から突きあげてくる悲し^{かな}さと狂ほしさから、思はず傍にあつたグ
 ロキシニアの真赤な花を掴みつぶした——鏡の中に一^{ひと}層強^{きは}く光
 つてゐた罪惡の結晶が血のやうに痙攣^{つりかゞ}んだ五つの指の間から点
 々と滲み出る。引き裂き、かき^{むし}りながら緊張しきつた心がまた
 遺瀨もなく啜泣く苦しさ。幸に獸ともならず迷うて迷ひぬいて、
 やつと夜ふけに静觀の境地を得た私の靈魂はまた少らずわれと驚
 かされて、そつとまた鏡の中を透かした。哀れな瞳が狂氣したや
 うな額の下からぢつと此方^{こちら}を見てゐる。私は悸然^{はっ}として乳の上を
 抑えた、白い手の芽も飛び出さなかつた、と思ふとぢつと黙^{つぶ}んだ
 唇が稍安心と憎惡の薄笑ひを浮べる。

夜が愈更けた。発作の後の悲しみが又犇々と迫る、深い恐怖に

顫へ乍らグロキシニアと冷たい鏡を片よせて、私はまた新らしく
顫へ初めた素つ裸の感覚から眼を凝らし、耳を聳て、まるで匍ひ
つくばった生蕃の児のやうに生々と暗い闇の核心を凝視^{みつ}めた。

こほろぎが鳴いてゐる……あれほど執拗^{しつこ}く人を苦めた白い濃霧
の集団までもう黴の毛ほどの細かい初秋の啜り泣きとなつて消
え散つて了ひ、霊岸島の瓦から瓦へ、ただ幽かに薄明るい露の潤^{しめ}
りがチラチラと夜光虫の漣波の如うに私歇^{ヒステリー}的里の蒼い光をすべら
し、取り残された彼方^{あちらこちら}此方の陰鬱な重い土蔵の廂^{ひあはひ}合^{ひあはひ}からはま
たセンチメンタルな緑色の星の影さへ一つ二つと燦^{きら}めき初める、
ホフマンスタールの夜の景色、暗碧な空の心——こほろぎまでが
恐ろしいお岩稲荷の物かげからまるで小さな硝子玉でも磨り合は

せるやうに絶間きりもなく感覺的な啜り泣きを続ける。

——苦痛と羞辱とに惨たらしく心のデリカシーを傷けられて神經は愈鋭く知覺は弥が上に冷たくなつてゆく私の現在にもなほ哀しみ極つたかういふ法悦のひと時はある。さり乍ら、緊張し尽した今日此頃の感傷の鋭さは殆どその極度に達してゐる。苦しい、今のやうな切迫せつぱつまつた生活があと三日と続いたなら私は狂氣するか、自殺か、それとも疲れはてた肉体自身がそれより以前に脆い破滅を持ち来すか、何れにしても私の生命は長い事はない。目下の錯乱した官能には最早や轡虫かなくと蝸めざましと、隣家の自鳴鐘ときりぎりすとの區別さへつかぬほど昼と夜とが顛倒され、色触の世界にも何時しか夏と冬とが入れ代つて了つてゐる。剩へ日が血のやう

に西からのぼり、月が痺れて東へ落ちかかる怪しい神経病者の幻^フ
アンタジャ
 想 さへ時折発作のやうに靈自身を^{おび}慄やかす。

今もこほろぎが鳴いてゐる。私はぢつと坪庭の闇を透かしなが
 ら、そこに如何なる罪惡が企^{たくら}まれつつあるか、如何なる草木昆虫
 の感覚が又かういふ深夜の心に冷笑し、惑溺し、干涉し、声もな
 く歔歔し流涕するかに耳を傾けた。それがよしや暗黒の中に各々
 幽かに万物照応の理順を秘^{かく}してゐるとはいへ、鋭感な今の私には
 松の葉が如何に光り、櫨が如何に戦慄し、雪の下が如何に肺病の
 蒼白い皮膚を滑らかな苔の上に擦りつけるか瞭^{はつきり}然感知し洞察す
 る事が出来る。

沈黙が一しきり続いてゆく。

ふと異しい物音がした、キキと何かを引つ搔くやうな、……と
 思ふとまた性急に、然し怖々^{おっおっ}と、否寧ろ時折は粗雑^{がさつ}に四肢^{よつあし}で引
 つ搔きちらす悪戯^{いたづら}な爪の響——それが絶間もなくキキとキキと
 続いてくる。畜生^{ちきしやう}奴！ 私はつと立つて電燈をパツとその方
 へ向けた。薄緑色の生絹^{きぎぬ}の笠を透かして青く漉されたオスラムの
 燭光が二階から出窓を斜めに暗い隣の屋根へさつと射^さす。私はぢ
 つと注意深くその方へ眼を注いだ。

何といふ悲しい光景^{シーン}であらう、そこには不意の輝きに驚かされ
 た柿の木が真青に顫へ上つた、と思ふと、濡れた葉とまた真青な
 果^{むらがり}の簇がキラキラと私の眼を射返した。何たる神秘、落ちついた
 真青な輝き……暗い深夜の秘密に密醸された新鮮な酸素の噎びが

雨後の点滴^{てんてき}と相連れて、冷たい靈性の火花も今真青に慄^{わな}き出した。……その下に猫がある。白い小さな猫がある。青い葉かげを透かして、緑青色に燦^{きら}つき出した新らしいコールタア塗の屋根の傾斜面からはつと驚いたやうに此方^{こちら}を眺めてゐるではないか。――顫^{やう}へる如に白い華奢^{きやしゃ}な身を竦^{すく}め、背を聳て、ただちつと青い射光の一点を見上げたまま、退^のくにも退^のかれず、全身の悲哀と恐怖とをたつた二つの金色の瞳に集めて、吸入るやうに前肢^{まへあし}をそろへた、あの眼、あの眼、あの切迫^{せつぱつ}詰つた眼の光、……ちつと凝視^{みつ}めてゐるうちに私の瞳は未だ曾て見たことのない皮肉な微笑と燃え上る憎悪と怒とに顫へて来た。

二つの靈がひたと今向ひ会つてゐる。而して各々の急所急所を

きゆつと凝視^{みつ}めて、痛ましいほどの凌辱を相互に続ける、その恐^お怖^{それ}と、憎々しき、私は電球の尖をキツと差向けたまま、まるで青ざめはてた大刀の魚のやうに立ち竦んだ。

ふと、ある苛酷な夢の記憶が私の胸の底から突き上げる。

＊

それは今朝ほど（もう昨日の事になつたが）の夢に見た、夢とも覚えぬほどの確に而して冷酷な一喜劇である。

夢は幽かな金線の顫へから初まる。ただ蒼い幻の中の出来事である。冷たい何かの切石の上に、幽かな薄玻璃の鏡の如^{やう}に坐つて

居た私の前に何時からとなく現れてひとと一列に座つた八九人の
児供がある。うち見るところななつやつ七八歳からじふごろうく十五六歳までの頑是
ない稚児の時代から既に物心ついた少年期の成人しきつた顔容かほつき
の奴まで、それがたつた一人の生長史をまざまざと見せつけられ
るかと思はれるまで、眼の大きい、額の広くつて青い、鼻の尖つ
た、何れも寸分違はぬ、小賢しい面色をしてゐる。而してただぢ
つと私を凝視めてゐる。蒼い光が何処からともなく其奴らの横顔そいつ
に射しつけると恐怖とも驚異ともおどろき、悲しさとも怪しさとも何と
も名状し難い冷たさが犇々と私の身邊に詰め寄せて来た。暫時しばしば
誰一人口を開くものがない。遠くで幽かにチリツンチリツンと一
絃の金線をつまぐる音色がする。

『どうぞその児を引き取つて下さいませんか。』

私は慄然ぎよつとした。声がしたのである。確かに、それが聴き覚えのある声である。人間の声とも畜類の呻きとも、又は草木の叫びとも、何ともつかぬ、冷酷な、それでなほ偏に縋り付くやうな、さうかと思ふと又心から人を見くびりせせら笑ひ影の影から操あやかし瞞たぶらかすやうな、一度聴いたら逃れる事も忘れる事も出来ない、何かの深い執念と怪しい魔力を秘ひそめた声音こわねである。

『たつた一人で宜しいのです、どうぞ何奴どいつか拾つて下さいませんか。』

声は何処からともなく追ひ縋るやうに続いた。愈媚びて愈悲しげな哀訴の裏には切つて放した残忍と詰詐と苦しい蠱惑とがある。

私は慄へた。而してただちつと一列の子供達を凝視^{みつ}めた。同じやうな冷たい顔がちつと同じやうに此方^{こちら}を眺めてほろりほろりと円^{つぶ}らな大きい眼の底から涙を流してゐる。私の頬にもほろほろ涙が流れてきた。

チリツンチリツン……金の絃^{いと}をまさぐる音色がする。

その声は何処^{どこ}からした？ 私は其奴^{そいつ}らの背後^{うしろ}を差覗くやうに幾度か蒼い光の中を透かして見た。猫児一匹るさうにもない。ただ置いてきぼりにされた幼い霊^{たましひ}が泣いてゐるばかり、金の絃の顫音さへはてはやんで了つた。

憐憫と憎悪とが犇々と迫る。私はさうしてゐる内にこの中の一人をどうにでもして引き取らねば済まないやうな恐ろしいある魔

力の圧迫と切実な愛情の罣わなに引き墮されて了つたやうな気がする。もう一度怪しい声がしたらどう為やう、あれかこれか、真蒼な私の眼が列の端から端までずつと見渡すと、一緒にその大人ませた陋しい、眼の大きく額の白い子供の顔がさも恨めしさうにほろほろ泣いてゐる。

私は愈切迫詰つまつたと思つた——然し声はそれつきり、いくら待つても待つても誰も何とも云ふものがない。次第に恐ろしい沈黙と突き放されたやうな寂しさが切々と私の心を襲ふて来た、恐ろしい、どうにかして逃げ出したい——

チリツンチリツンとまた金の絃を弄ぶ響がする。

*

私ははつとして、電燈の栓ねぢをひねつた。と一緒にかさかさと慌てて逃げてゆく物音が、真闇まつくらに掻き消された亜鉛屋根から忍びがへしに飛び下り、忍びがへしから板塀の裏を転がるやうに這り落ちるその迅さ、慌ただしさ……

逃げたな、畜生！　ほつと吐息をついた、私は今、真闇まつくらな向ふの路次口に転がり落ちて逃げてゆく猫の滑稽な動作を想像した、而して急に勝ち誇った感情の弛緩さへと陋さへしい皮肉な冷笑とが多少の可笑をかしみをさへ交へて私の心に突き上げてきた。私はまた何となく軽い安堵を覚えた、而して更に注意深く幽かなその夜明前の微光

を透かした。

夜は益々更ける、而してこほろぎがまた恐ろしいお岩稲荷のかげから冷たい硝子玉をすり合せて鳴きつゝのる。

再び電燈をパツと点けた時、私はそこに初めて信実な柿の木の姿を見る事ができた、新らしい悲^{かなしみ}哀と驚^{おどろき}異、まだ固い真青な柿の実はキラキラと厚い葉の簇から銀と緑を射返し、あの華奢な白猫のゐたあたりには、ただ空しいコルター屋根の斜面だけが今まるで青硝子のやうに上り輝いて、葉末に残つた露の点滴のみ幽かに光つては消えて落ちた。

こほろぎが鳴く。

私はまた静かに寂しい闇の核心を凝視^{みつ}めながら、更に新らしい

靈魂の薄^{ツワイライ}明^{イト}を待たねばならぬ。

ふさぎの虫

大正元年八月二十六日午後四時過ぎ、俺は今染々とした気持で西洋剃刀の刃はを開く。庭には赤い鶏頭けいとうが咲いてゐる。細い四角の西洋砥石に油をかけ、ぴつたりと刃はを当てると、何とも云へぬ手あたりが軟かな哀傷の迂まがりを続ける。奇異な赤い鶏頭、縁日物ながら血ちの如やうな鶏冠とさかの疣いぼ々々が怪しい迄日の光を吸ひつけて、じつと凝視みつめてゐる私の瞳を狂気さす。

鶏頭けいとう、汝おまへはまるで寂寥と熱意との一揆のやうだ、何時おまへでも汝の集團むらがりさへ見ると俺の気分が鬱ふさぎ出す。

余程眠りこけて居たのか、昼寐から俺が覚めた時にはもう誰一人家内うちには居なかつた、昼間の活動でも見に行つたものと見える。



而して俺一人が装飾かざりも何にもないガランとした下座敷にぼつねんとかうやつて坐つて居る。何にも為る事がない、ただもう倦怠だるい、仕方が無いので妹の鏡台を縁側に持ち出して又かうやつて剃刀の刃を当るあた。鶏頭が莫迦に光る、それかと言つてくわつと光つた外光の中に何かしら厭な陰気さが嘲笑あざわらつてもゐるやうに、赤い鶏頭とさかが眼に染しみる、茎が戦ぐ、その根元から小さい蜥蜴が走り出す。

何処かで御大喪中の忍びやかな爪弾の音が洩れる。昼の三味線、赤い鶏頭、それが真赤に陰気にこんがらがると、今度はまたお隣のお岩稲荷から恐ろしいお百度参りの祈願と呪咀との咽び泣きが

絶間しつきりもなく俺の後脳に鋭い映画フィルムの閃光を刺し通す。

[Gen-gen, byo_-soku-byo_,] …… [Gen-gen, byo_-soku-byo_,]

……お岩稲荷大明神様……南無妙法蓮華経……

日が光る、くわつと暑い空気が淀む、鶏頭が笑ふ……石鱖を剃毛で掻き立てて顔一面に塗りつけると、白子しろこのやうに眼ばかり青く光り出す。剃刀をぴたつとつけてすうつすうつと込らせると寂しい心が無性に晴々する。

それでも鶏頭、鶏頭、俺は悲しい。

真赤な歇私ヒステリー的里の鶏頭、

お岩稲荷大明神様……

不図、俺は気がついた、何といふ坐り態だ、まるで汝の肉体は白痴の女見たいにぶくぶくだねえ、だらしのない、どんなに暑くたつて、もつとチャンと坐つておゐでなさい。

眼が鏡の中で笑ふ、剃刀が咽喉の薄い皮膚を切る、危ない、グツと突つ込んだら汝は其儘寂滅だ。

——哥兄や二階で木遣の稽古、音頭取るのがアリヤ良人エ
ンヤラナ……

にとにとと石鹼が指さきに流れる、気味の悪い、冷たい、かと思ふと何処かで忍び笑ひの声さへ聴へる、三味線が急にはしやぐ、

……エンヤラヤレコノサア……サノセーアレワサエンヤラナ……

唄どころかい、

俺は苦しい、苦しい、鶏頭、真赤な鶏頭、

日が光る、お百度参りが泣く、俺の後脳が真赤に瞬く。またた

露西亞の所謂トス力ではないが、今日此頃は鶏頭さへ見ると俺のふさぎの虫がしくしくと腹の底から募り出す。

[Gen-gen, byo_-soku-byo_] …… [Gen-gen, byo_-soku-byo_]

……お岩稻荷大明神様……南無妙法蓮華経……どうぞ旦那との縁が切れますやうに……

恐ろしい、真昼間まつびるまに何事だ。

おやお前さんは泣いてるね、鏡の中で泣きつ面するのはお止しなさい鼻でも剃り落したらどうします。

鶏頭、鶏頭、真赤な鶏頭。

まだ汝はあおまへの女に未練があるのかいと俺の眼が剃刀の下からに
つと笑ふ。

一生の恋だ、命かけての愛だの信実だのと云つた蜜の如やうないつかの抱擁も千言万句の誓ひもさうめき歡語も、但しは狂ひに狂つた欲念の焰ほむらも、ただ一息に押しこかしてゆく「時」の力の前には何等の矜持も權威もあつたものでは無い。時は過ぎてゆく、而して凡てが何時となく伝奇的な美しい幻想の色彩いろどりの中に掻き消されて了

ふ……

ほつと吐息をして眼を瞑る、剃刀が頬辺に冷やりと沁る……
怪しい罪惡の秘密と淫蕩な官能の記憶とが犇々と俺の胸を搔き
る……

も一度逢ひ度い……ハツとして眼を開けた、嘲笑ふやうに鶏
頭が光る。

ほんとにあの鶏頭のやうな女だった、お跳さんで嘔吐きで伶俐
で愚かで虚栄家で氣狂で而して恐ろしい惡魔のやうな魅力と美
しい姿……凡てが俺の藝術欲を喉かし瞞らかし、引きずり廻すに
は充分の不可思議性を秘して居た、縦へ、それが代々木の草原を
飛びあるく白栗鼠の児のやうに或は陋しく或は輕浮であらうとも

俺にはまた却てその無邪氣と痴態とが萎^{しほ}らしくも亦憫^{いぢ}らしく思は

れたのだつた……そればかりか俺も亦釣られて栗鼠のやうに飛び

あるいた……而して遂^{おしま}ひには二人とも監獄に墮ちて了つた……兎

に角……と又右の眼が熟^{ぢつ}と靈魂^{たましひ}に喰ひ入るやうに覗き込む……

汝^{おまへたち}達 はあまりに夢想家だつた、殊に汝は現実^{おまへ}そのものの生活

をあまりに芸術に為^し過ぎた……さうだ、それに違ひないと悲しい

左の眼がうなづく……汝^{おまへ}が今日のやうな惨^{みじ}めな世間の侮蔑と圧迫

を蒙るのも当然だ、道ならぬ恋は一度は破滅する、美しい幻影も

遂には破れる……さうだもう幻滅だと又左の眼が切なさうに差し

覗く……初めそれほどにもなかつた汝^{おまへ}が奈何^{どう}して又あんなに急に

夢中になつて了つたのだ、と右の眼が剃刀の下から嘲るやうに喰

ひ入つてくる……それは俺にも解^{わか}らない、只俺の芸術至上主義が
 俺自身を妖艶な蠱惑と幻感の世界に昏睡さして了つたのだ、罪惡
 がそこで釀^{かも}された、つくづく俺は俺の魔法の空恐しさを知つた、
 而して女の美しさを、……啜り泣くやうに左の眼が光る。……誇
 張してはいけない、一体どちらが悪者なのだ、世間では汝^{おまへ}の方が
 正直過ぎた、畢竟擬^{つまりにせだま}宝玉を買被り過ぎた、もつと薄情におひやら
 かして逃げて了へば何でも無かつたと云つてゐる。……有難う、
 警察でも監獄でもさう訊かれた、一体汝^{おまへ}達はどちらから先に手を
 出したのだと、……双方の眼が一時に苦笑する……さういふ上品^{わな}
 な世の中だ、疑はる可くして初め疑はれ、待ち設けた最後の罠に
 墮つ可くして的確に二人とも墮ちた、而して結末も至極簡単に解

決した、それで可い、それで可い、二人のやうな罪囚の痴態はただ美しい伝説の中にのみ生甲斐がある。もう何事も訊いて呉れな、……フン、それではこれ位に切り上げやう、何れにしても汝は莫迦だ、飛んでもない阿呆だ、罪人だ、氣狂だ……さうだそれには違ひないと両の眼がじつとうなづく……

カラカラチーン、チーン、チーン、チーン……氣まぐれな隣の自鳴鐘とけいがもう夜の十時うを点つ、夕日うつとりがくわつと壁から鏡に照り反す。鶏頭うつとりが恍惚と息をつく、風が光る。

「そばからくゝと起る残念な事、口惜しい事、迫害、いろゝの事情にせめられて平常からきかぬ氣の私はとりつめました、自殺

と覺悟をきめました、然しここで死ぬのはいや、今一度お目にかかり度い——」……

はつとして後を振り向いた、誰もゐないガラソとした部屋の天井にただ手水鉢の水が斜めに水陽炎を投げてゐるばかり、ちらちら動く、光る、影と影とが逃げてゆく、追ひ廻す……

また向き直ると昼の恐怖が寂として後からそつと髪の毛を引つ張る。

「あなた此まま私を放つてお置きになるのですか、純様、ああ純様、恋しき恋しき純様、はやくはやく私を助けて下さい、逃げて下さい、苦しい残念、口惜しい、只一人の姉の同情で——いづれく私逃げ出します、近いうちにさうして自殺します。」

狂気のやうな女の姿が眼に見える、俺もあの時は夢中だった。

苦しかった。而して机の上にあつた真赤な眼無達磨を思はず抓みつぶして硝子に擲きつけた、また飛びついて小刀でグザとその白眼玉を刺し通した。さうだ、そうだったに違ひない。

「私は覚悟致しました、決してくあなたまで死んで下さいとは申しません、死んでもいい、どうぞ私を引き出して下さいく。」

追つかけてまた手紙が来る、俺も火のつくやうに旅行支度をする、それでも待てないであのお跳ねさんは到頭身体がもう変だ、見るものも見なくなつたと云つて寄越した、かと思ふとその手紙より先きに大和の笠置から鵲の立つやうに飛んで来た。

南無三！……思ひ出しても身体が顫へる……そこにもうちやん

と恐ろしい罨が二人を待つて居たのだ、それから俺達は飛んでもないところへ旅行して了つた。

嘔吐き、嘔吐き、真赤な嘔吐き、俺は何もかも知つて居る、私に切迫詰せつぱつまらして愈心中させる氣だつたか、それとも淫蕩な夏の旅行に私を誘き寄せやうとしたのかを、どちみち二つに一つだ。俺にしろもうあの時はあの女を思ふさま淫逸な欲念と熾烈な死と官能の幻惑の中に引きずり廻すより外に途がみち無いと思つたのだ。

ほつと眼を瞑る、

「私はあなたが憎らしい、あなたは私を世の中から、凡ての人から見はなさせて一人ぽちになつた後、いぢめていぢめてつき放さうとなさるに違ひありません、口惜しい、入らつしやい、ここ

はつと思つて空を凝視^{みつ}める、光が蜂蜜^{やう}の如にキラキラとふりかかる。

前の電線^{はりがね}に雀がチュチュツと飛んで来て交^つんだかと思ふとパツと別れた。

「悪因縁だ」——聽てしてほつと眼を下に落して又染々と剃刀の刃を手元に引よせた。

「悪因縁だ」——もう逃れつこはありやしない。

南無妙法蓮華經……

まだまだあの女将^{おかみ}はやつてゐる。キリキリと砥石^{ひとあて}に一当あてて、じつと聴くともなく刃^はを返すとホロリと涙が落ちた。

弱虫……苦痛と凌辱との思ひ出が切々と蘇る。未決監を出てからもう彼是一と月、その間、日となく夜となく緊張し切った俺の神経はまるできりぎりす蠢斯のやうに間断きりもなく顫へ続けた。狂気と錯乱とがもう俺の目前に赤く笑つてゐる。さもなくとも俺は短命だ、ただ一息に俺は俺の息の根を吹き続けるより外に仕方がない。

[Gen-gen, byo_-soku-byo_] …… [Gen-gen, byo_-soku-byo_]

……

苦しい、苦しい、奈何どうかしてくれ、真赤な地獄絵の映フィルム画がキラキラキラ俺の後脳に烙きつく。ふさぎの虫がしくしく募る。

ワンズワースの牢獄に初めて謙虚な悲念に搔き暮れ得た驕慢な

天才児の末路は汝おまへにいい訓戒だ。

さりながらあの市ヶ谷の監獄生活は誠に貴い省察と静思との時間おまへを汝に与へたと、鏡の中から悲しげな両の瞳が熟視みめる……

あれから苛酷な世の嘲笑と圧迫は日夜続いた、それでも汝おまへは能く耐えた、と又剃刀が冷たい沁りを額に続ける……

鶏頭、鶏頭、記憶は悲哀を再燃させる。汝おまへが初めて町の安床に

行つた時……と又眼が憎さげに顫へる……がらがらと駆けて通つ

た囚人馬車がまるで汝おまへの頭を轢き潰つぶして鏡一いつぱい面に黄色く光つて

行つた時、あの狎のやうな下司ばつた顔の親方が何と云つた。

「囚人馬車の癖に宮様のやうに威張りかへつてのさばりやがる……

……一体あんに幾いくたり人乗つてやがるんだろう……あんな罪人なん

て奴は何だね樺太三界にでも追放おつぱらつちまつた方がいいんだ、ねえ旦那。」

その時の汝おまへの顔つたら無かつたぜ、「どうせ監獄の御用馬車だ、

お客さんはせいぜい十人か十一人に極つてゐる、さうだあんな罪人は樺太にでも追放したがいい」汝おまへは顔を真蒼にして顫へたつけ

ね、それからその翌日は……と又剃刀が眼と眼との間に顫へる：

…寄席の鈴木で、あの眼のクルクルと大きい厭味な洋服姿の秋月の奴が現在汝おまへのゐる前であのキザな十題話の落しに面白をかしく

間男の意見をして見せた。あの時傍に小さくなつて居た弟が、あの

内気な弟が顔を真赤にして兄さん兄さんと汝おまへの袖を曳いた。

「心配するな、俺はもう何と云はれたつて姦通者に相違ないのだ、

皆が皆寄つて群たかつて苛いぢめるならもつと苛いぢめろ、もつと苛いぢめろ、一
 層つその事ぐいと銀の槍でも突き通せ。」汝おまへの心はもうその時犇いぢと優
 しう Tinka John の身体を抱き擁めてゐたつけね。又その翌日は：
 ……思ひ出しても厭やな暑い日だつた……苦しさ紛れに飛び込んだ
 あの汚い八丁堀の大路次亭では見るからに貧乏臭い瘦せぎすの講
 釈師が頓狂に顔を顰め乍ら張扇をペタペタと叩いてゐた。而して
 また汝おまへの面前でヤンヤと人を笑はせた、……さうだ俺はよく知つ
 てゐる、だらしく昼寝してゐた爺までが齒の無いモガモガの口
 をあけてフナフナと笑ひ転けたあの時だ……「へえい、小桜さん
 の花魁おいらん、ええ、あの花魁は」と頭を搔いて番頭が「実はなんで
 ゲス、恰度昨日で年が明けましてな、それで店の吉どんと一緒に

国へとか申しましてついさきほど立つて行つたばかりで、へい。」

「ナニ、国へ歸つた、国、国とは一体何処だア。」「へえ、吉どんの故郷とかで。」「吉の故郷は何処だア。」と黄色い声をして、金を貢いで挙句のはてに欺された旗本の野呂馬息子が齒噛みをする。「筑後の柳河ださうで。」「筑後の柳河ア。」口惜しさうに声が泣き出す。「へえ、大分遠方で、何でも長崎の傍ださうで、えつへつへ。」さうだ、如何にも俺の故郷は筑後の柳河だ、それがどうした。笑ふにも笑はれない、何といふ惨めさだ。汝は思はず敷島の袋をぐいぐい抓みつぶして了つたつけね。

[Gen-gen, byo_-soku-byo_] …… [Gen-gen, byo_-soku-byo_]

……お岩稻荷大明神様……どうぞ御願ひ奉る……

喧ましい、鶏頭、鶏頭、俺の肝の虫がもう弾ぢぎれさうだ。

暑い、暑い、くつわ虫が啼く、かなかな 蜩が啼く、くわつと外光が眼に
 にじむ、陰気な鶏頭がまた真赤に心のどん底から笑ひ出す。それ
 だのに何としたか意久地なしのたましひ 靈魂がまたトス力的に滅入り込
 む、しよげ 気が悄氣る。ポロポロと涙が零れる。

不図眼を落すと、鏡台の上に空になつた香水の壇が載つて居る、
 その白いレツテルの腹の上に又小さな一寸蠟燭を立ててある。家
 内の ち Tinka Ongo でもやつた事だらう、面白い、と一寸妹に感心
 する、而して又物好きな心がその寂しい心の尖にしんみりとマツ

チを擦りつける、と昼の焰が微かに燃える。鏡の面を少し立てるとその中に声もなく焰が吸ひ込まれる。而して真昼間だのに俺の心の心が幽かに泣き初める。

おまへ

汝は我儘だつた、而してあまりに芸術上の趣味なり嗜好なりに贅沢過ぎた。譬へ天真の稚氣と信実とが絶えず心の底に昼の蠟燭の様にちろろめいてゐたにもせよ、馴れ過ぎた天の恩寵と世の浅はかな賞讃とが何時しか汝の貴重な靈性を盲目にした。怪しい感覺と不可思議な官能の幻感が又汝の肉体を思ふさま翻弄した。

汝は家庭に於ても一種の暴君であつた。それかと云つて汝ほどあの寂しい人々の間から尊敬と愛慕と信賴とを集め得たものはない、汝は七情の赴く儘に色を換ゆる無邪気な光のかめれおんであ

つた。然しまた豹のやうな空恐ろしい愛情の残虐をも敢てした、また怪しい魔法使ひの鞭のやうに凡ての肩の上に柔にその恐怖と愛憎の吐息とを投げかけた。汝はいかにも優しかつた、温かであつた、然し又氣まぐれで、神経質で、能く怒り、能く苦しんだ。例へばその時折の衣服の調色^{いろあひ}、ある日の汗の臭などの些細の感覺の不愉快から終日母の傍に坐る事さへ苦痛にしたほど我儘で又驕奢であつた。

然し汝が^{おまへ}一日家に居ないと家中の者は皆陰氣な^{じゅんさい}蓴菜^{もろこし}のそばからふいと温かな麝香猫でも居なくなつたかのやうに何時も妙に滅入つて了ふのが眼に見える。現在汝の弟は汝の芸術の第一の崇拜者ではないか、剩へ汝の婆やなどはまるで汝一人を神様か活仏

のやうに頼り縋つて居る。實際、かういふ滑稽な盲信位難有迷惑な事はない。だがよしや汝が世間から棄てられ笑はれ嘲られても汝の肉親の凡ては汝に縦ついてゆく、而して善かれ悪かれ汝の為る事には頭てんから信じ切つて居る。

何が仏だ、思はず手に持った剃刀を向ふの壁に投げつけた。キリキリ突き立つてピヤンと跳ね返る。

印度の仏と能くあの若い独逸の画家に戲けた手付で例も皮肉な礼拝を受けさせられた熱帯系の菩薩面がニコリともせず鏡の中で顫へてゐる。厚い唇が今日は不思議に真赤に見える。昼の蠟燭が鼻の真向まつかうにしんみりと光り輝く、眼と眼とが凝ぢつとその底から吸ひ付くやうに差覗く……つくづくと陰影かげと靈魂と睨み会つたまま

底の底から自愛と憐憫の心とが切々と滲み出る。「ほんとに痩せた。」ほつと吐息をしてまた俺の気分もあれから随分変つたものだと思ふ、どんな苦痛と羞辱とに身を鞭れ曝されても持て生れたデリケエトな誰にも懐かしがられるあの貴い心持丈は少しも傷けないで居られたと自負する心の裏から、流石に険しくなつた額付や皮肉な口元の^{ひきつり}痙攣さへ目につく。

ちつとこみあげてくる哀傷の一念を抑えて、剃り立ての真蒼な面の光沢を^{ひえ／＼}冷々と労ると、暑い夏の日にもしんみりと^{たましひ}靈魂の冷たさが身に染みる。

全く誇張された同情や信賴や愛情の過剰な負債には堪へられない、堪へられないばかりか或時は寧ろ嫌悪と反感と冷酷な肉親の

吞嚙をさへ感ぜしめる。どうかして切り抜きたい、独になりたい、そればかりに俺は思はず血で血を洗ふやうな残虐な暴君にもなつた、罪人にもなつた、親不孝者にもなつた。かと云つて俺は俺の貴い靈魂をこれ以上に自ら侮蔑し傷け墮落させる事は出来ない、剩へ俺の肉体を血まみれに刺し貫いて俺自ら陋しい賤民の死体のやうに大道の真中に放^{うっちゃ}棄り放す訳にはゆかない。俺は俺自身が愛^{いと}惜い、命が惜しい、死に度くない、況して嘘か真^{ほん}実か第三者の中傷か、いざとなつたら二人のどちらが罪が重くなるだらうと一時はわなわな顫へたといふ、あの輕薄なお跳ねさんなんぞと一緒に死んでどうなる――

俺が自殺したら無論肉親の一人二人は墓場迄も縦いて来るだら

う——これは偽りでない——而してあの女でもひよつとかしたらあの可愛い小さな心臓を今度は戯談でなしにキュツとピンの尖きで突き刺して笑つて眠て了ふかもわからない。然し俺は心中は御免だ——独で死ぬのももう厭になつた。たつた一人で生き度い、命が惜しい。

それはいつぞやは死なうとも思つた、俺の好きな植物園の薬草花壇で、毒藥を喫んで、あの大蒜にんにくの根や、茴香の蕾を抓み散らして、精一杯に苦んで、藻掻いて血を吐いて、而して笑つて真蒼に腐つて了ひ度い——とも思つた。然し母迄がおせつかひにも一緒に自殺でも為さうな氣振に見えたので、急に俺は不愉快になつて、その足で浅草の活動写真見に飛んで行つて了つた。

毒藥と云へばあの俺がある種類の予防に納^{しま}つて置いたあの甘汞を、何と間違へたか、蒼くなつて慌てて秘^{かく}して了つた俺の弟はほんとに可哀い道化ものだ。

鶏頭、鶏頭、俺の弟はほんとに可哀い道化ものだ。

時が経つ……蠟燭の火がぢぢと幽かに瞬く。

鶏頭、鶏頭、

記憶に悲哀は再燃する、切迫^{つま}詰つた俺の感覚が四^{よつ}ん匍ひになつて剃刀を拾ひかける、ハツと靈^{たま}魂^{ましひ}が後から呼び返すと意久地もなく。パタリと身体が平べつたくなる、苦しい涙がポトリポトリと

額を抑えた手の甲に零れる……

轡虫が啼く……唐突やにはに座り直して、ぐいと右の指を二三本白粉

の瓶に突つ込む。ぐるぐると掻き廻してぺたりと面にぶつつける、

……ふさぎの虫がクスクス笑ふ……狂者きちがひ、狂者、まるで汝は狂

者だ、恚かうして居る中にも頓狂な発作の陰謀たくらみが恐ろしい心のど

ん底から可笑をかしいほどはしやぎ出す、白粉おしろいを水にも溶かさな

でべたべた塗りつける、にとにと面が突張つつばる、眼が光る、見る

見る能のお面のやうに真白に生色のない泣つ面つらが出来上る。さう

でもないか、此奴こいつ、解剖学の標本室で見た死刑囚の白い面型その

儘だ、さうだあの面型には眉の毛が二三本赤つちやけてくつつい

て居たつけな——ここまで擲揄からかつて来て俺ははつと思つた、能い

加減に巫山戯け散らしてゐた靈魂がピタと緊張まる。ひきし 眼が黒く光り出す、急に恐ろしくなつて粉紅こなべにの円い球をぐいと右の頬ほつぺた辺ににじりつける、と紅い日の丸の烙印が如何にも道化らしくパツと燃え出す、面白い、左へもひとつぺたりとにじりつける、あはは、泣つ面つらがやつと笑ひ出した。立派な戯ヂヤウカア奴だ、これでひとつ浮かれて退けるか。

活惚カッポレ、活惚カッポレ、何処かでまだ三味線を弾いてゐる。ついと立つて紅い道化頭巾を冠る、浴衣を脱ぐ、薄いシヤツ一枚になつて、さて眉から鼻、口元と白粉ならを均す、長い瞼毛まつげの周囲まはりを青インキで濃く隈をつける。

隈と云へば未決監では面白かつたな、とクスクス皮肉な笑が咽

喉のぐりぐりにこみ上げる。ねえ汝は贅沢だつたよ、牢屋に居な
 がら三度三度、スープに洋食を三品宛、それに果実は欠かしつこ
 なし、あまり辛気なので食べ残しの水蜜桃で真紅な自画像をぬた
 くりつけてひどく叱られたつけな、あの挿^{エピソード}話は誰に聞かした
 って腹を擁^{かか}えるだろう、この悪戯^{いたづら}者はその翌日看守長から鹿爪
 らしく呼び出された、それはかうだ。「三八七番、この真紅^{まっか}な面^{つら}
 は何だ。」「それは私の顔で御座います。」「何で描いた。」
 「水蜜桃の腐れたので描きました。」「ぢやあこの黄色いのは何
 を用^{つか}った。」俺は髪の毛をもじやもじやと真黄色になすりつけた
 のだ。「それはバタで。」「この点^{ポチ}々^{ポチ}は何だ。」「それは辛子^{からし}
 で御座います。」「青い眼玉はどうした。」俺はつくづく苦笑し

た、「それはサラダを絞しぼりましたので。」一帖の半紙を一枚めく翻ると矢つ張り下にも俺の真紅な顔が泣つ面をしてゐる。また翻めくると矢張り黄色く滲み込んでゐる、また一枚また一枚、矢つ張り青い眼玉が光つてゐる。俺ははらはらしながら自分の面の皮でも一枚一枚ひん翻めくられるやうに辛かつた……

ぷつと吹き出して立ち上ると、活惚、活惚、三味線が調子をつける。

[Gen-gen, byo_-soku-byo_] …… [Gen-gen, byo_-soku-byo_]

……お岩稻荷大明神様……南無妙法蓮華経……どうぞ商売繁昌致しまするやうに……

鶏頭、鶏頭、俺はもう気が狂ひさうだ。

活惚、活惚、甘茶で活惚、塩茶で活惚、ヨイトナ、ヨイ、ヨイ、

……

くるくると二つばかりとんぼがへりをする。ガランとした部屋の中に、たつた一人、真白な面を緊張め^{ひきし}てくるくるともんどりうつ凄さ、可笑^{をかし}さ、又その心細さ、くるくると戯^{おど}け廻つて居る内に生真面目^{きまじめ}な心が益落ちついて、凄まじい昼間の恐怖が腋の下から、咽喉から、臍から、素股から、足の爪先から、空一面^{そらいつばい}に拡がり出す。

鶏頭が真赤に真赤にひつくりかへる。

頭の映^{あたま}画^{フィルム}がキラキラキラひつくりかへる、^{かなく}蝸が鳴く、お

百度参りが泣く、三味線が囃し立てる。

活惚、活惚……

三味線がハタと止む……

と、くるとくと転ころがつてゐる俺自身が俺にももう恐ろしくて恐ろしくてたまらなくなつた、思はず投げつけられた盗賊猫どろぼうねこのやうにぽんと起き直るとその儘パタパタと二階に駆け上つた。

昼の蠟燭がまた幽かに取澄まして瞬く。

それから暫時しばらく経つて、殆素つ裸の俄作りの戯チヤウカア奴は外の出窓に両脚を恍惚うつとりと投げ出して居た。而して今霊岸島の屋根瓦の

波の上にくるくると落ちかかる真赤な太陽の光を凝ぢつと眺めて居る。
 雲の影ひとつ見えない大空の果に鳩が火の玉のやうに飛んで居る。
 煙突の煤烟がくさくさと渦を巻く、電線が光る。

それでも、向ふの土蔵の屋根の上に枯れかかった名も知れぬ雑
 草がしんみりと戦ぐでもなく戦そよいでゐるのが眼に付いた、その僅
 な二三本しかない幽かな草の戦みぎがちつと熟視みめて居るうちに、
 先程の活惚騒わくぼぎで取り落したふさぎの虫をまた染々とぶりかへす。
 草が戦ぐ、また意久地なしの霊魂たましひが滅入めいじゆつて了ふ。悄氣しよげる、鬱ふさ
 ぐ……涙がホロホロと頬つぺたを流れる。

♪〔Gen-gen, byo_-soku-byo_〕……〔Gen-gen, byo_-soku-byo

〕……

急に寂しくなつて、まじまじと下を向く、とまた生憎な、目に入るでもなく庭の垣根越しに向ふの長屋の明け放した下座敷が見える。

おや、もう電燈でんきが点いて居る。昼間の光に薄黄色い火の線と白い陶器せつものの笠いづばいとが充分にダラリと延ばした紐の下で、畳とすれすれにブランコのやうに部屋中揺れ廻つて居る、地震かしらと思ふ内に赤坊あかんぼが裸で匍もひ出して来た、お内儀かみさんが大きなお尻しやのめだけ見せて、彼方あちら向いて事もあらうに座敷の中でパツと紺蛇じやのめ目傘から博多節か何か歌つて居る。

変だ、何だか何処かで火事でも燃え出しさうだ、空が焼ける、

子供が騒ぐ、遠くの遠くで音も立てずに半鐘が鳴る……をや、俺の脳髓あたままでが黄きなくさくなつて来たやうだぞ……犬までが吠え出した……何か起るに相違ない。

南無妙法蓮華經……お岩稲荷大明神様……

苦しい、苦しい、汗が流れる。

恰度こんな暑い日だった、俺は監獄で……と戯奴チヤオカアが面しかを顰める

……俺は監獄であまり監房へやの臭氣が陰気なので、汚ない亜鉛の金盥に水を入れて、あの安石鹼を溶としては両手で掻き立て掻き立て、強い弾ぢきれさうな匂を息の苦しくなるほど跳ね散らしてゐた。

真白こまい細かな泡と泡とが、緑に、青に、紅に、薄黄に、紫に、

初めは紫陽花、終まひには、小さな宝玉に分解して数限りもなく

夏の暑熱と日光とに光る、眩やく、泣く、笑ふ、嘲る……恍惚うつとりと見入つて居ると、コツコツと隣の厚い壁板を向ふで敲く。そこで、俺も泡まみれの手でコツコツと合図をして「奈何どうしたの。」と腰をかがめる。

「今日けふは盆の十六日ですねえ。」と氣のない疲れた声が投げ出すやうにきこえる。

「さうだ、盆の十六日。」と俺も一寸可笑をかしくなる。

「もうつくづく厭になつちやつた、ああああ……」

これがこの二月に浅草で友達を殺した男の声かと思ふと、何となく変な、不憫な、厭いやあな氣がする。二月から入監はいつて、まだ一度か二度法廷に引つ張り出されたつきり、まだ刑も極ほつらず、放た

らかしにされて居るのである。飽き飽きするのも無理もない。

しばらくだま暫時黙つて居ると、またコツコツと甘へるやうに背後をうしろを敲く。

「何だね。」

「あのきんたま辜丸抓んだら死ぬんでせうか。」

不意に俺の眼が笑ひ出した。

「そりやあね、ギユツと抓んだら何時いつでも死にます。」と口を寄

せて、また物好きに道化心が笑ひ出す。

「だが、一体誰だれが抓むの誰のきんたま辜丸を。」

あつし「私が抓むんですがね。」

猫のやうに頓狂な声が出た。

と、思ひ出すと、取り澄ました俄作りのヂヤオカア戲奴が一時に真白な顔

の造作を破裂さした、はははは、自分でも吃驚するほどの大きな声を挙げ乍ら、腹を擁えて出窓から畳の上に転げ廻つた、而して又転げ廻つてく世界中心がひっくりかへるやうに笑ひ続けた。

ははははは………

ははははは………

集のをはりに

数少きわが歌の中より、選びて僅に四百余首を得たり。わが歌はかの銀笛哀慕調のいにしへより哀傷篇四章の近什にいたるまで、凡ては果敢なき折ふしのありのすさびなれども、今に及びては旧歡なかなか忘れがたし、ただ輯めて懐かしく、顧みて哀愁さらに深し。

処々に挿みたる小品六篇のうち、「桐の花とカステラ」「昼の

思」の二評論は時折のわが歌に於ける哀れなる心ばえのほどを述べたれども、そはわが今のつきつめたる心には協はず、ただ詩のみ、余情のみ、うはかはのただひとふれのみ。

わが世は凡て汚されたり、わが夢は凡て滅びむとす。わがわがき日も哀樂も遂には皐月の薄紫の桐の花の如くにや消えはつべき。わがかなしみを知る人にわれはただわが温情のかぎりを投げかけむかな、囚人 Tonka John は既に傷つきたる心の旅びとなり。

この集世に出づる日ありとも何にかせむ。慰めがたき巡礼のそのゆく道のはるけさよ。

この心を誰か悲しく弄ばむやんごともし
やんごともし

一九二二、初冬

著者

T

TOKIO



青空文庫情報

底本：「白秋全集 6」岩波書店

1985（昭和60）年1月7日発行

底本の親本：「桐の花 抒情歌集」東雲堂書店

1913（大正2）年1月25日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※図は、底本の親本からとりました。

入力：光森裕樹

校正：岡村和彦

2014年9月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桐の花

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>